

243

曾木佐野叔義錄  
初編  
全



特60  
243

浮田爲十郎正通

禁戸

浮田傳五右門之長子

浮田爲十郎正通





特 60

243

琴戸

浮田傳五右門之長子

浮田爲十郎正通



會本左子長長録

口ノ





音川家之忠臣長盛藏人常則

音川家之嬖臣橘左近之助

芳洲

佐野出羽清安之二男



佐野鹿十郎清章後浮田傳五右工門奴僕鹿藏





秀池

大館七郎右門

浮田民助





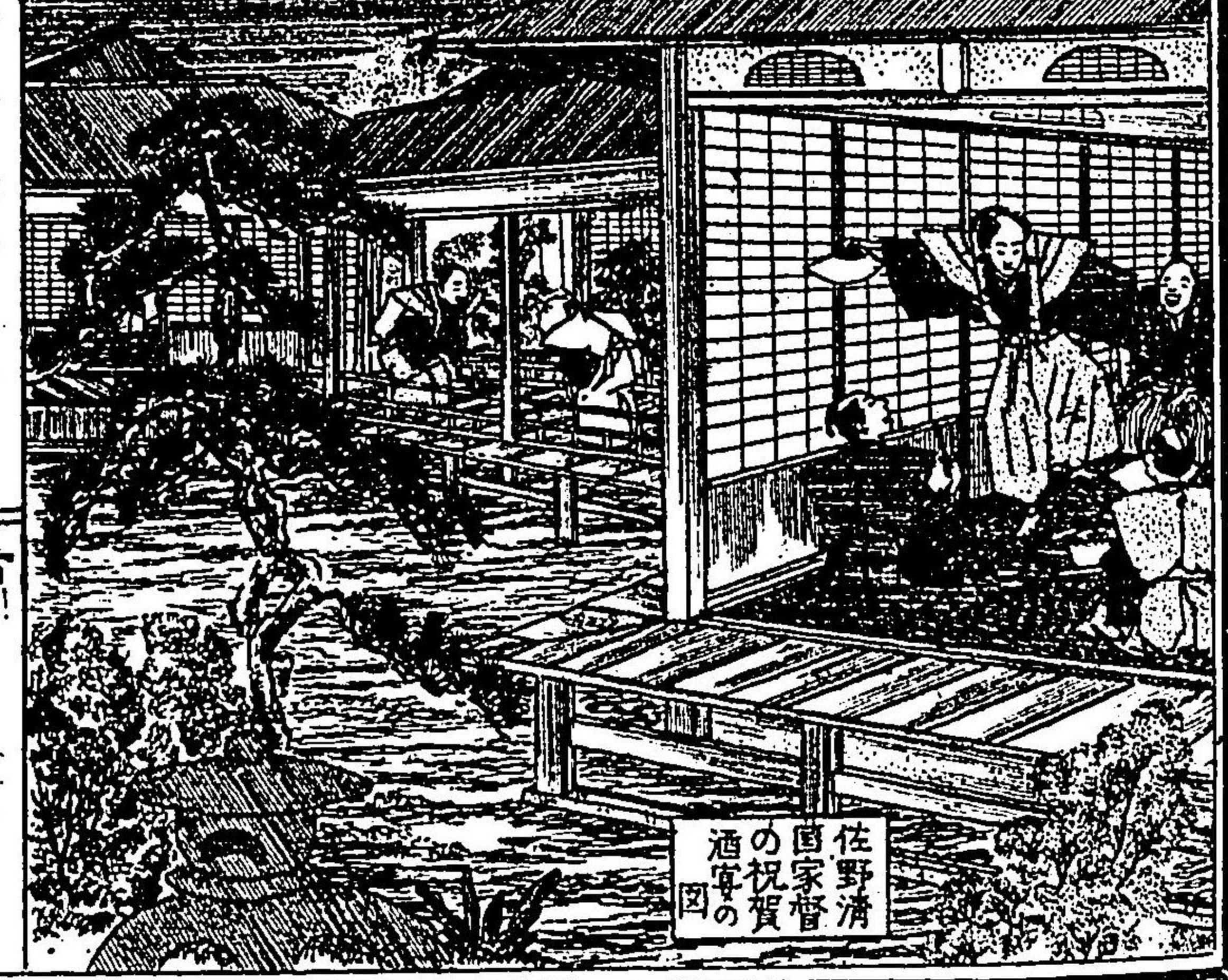
繪本佐野報義録初篇目錄

- 一回 佐野鹿十郎武藝出精るま話
- 二回 佐野鹿十郎狂乱家出奔之話
- 三回 浮田傳五右門旅中狂人を救ふ話
- 四回 大館橘悪計浮田爲十郎難儀の話



繪本佐野報義録初集卷之一

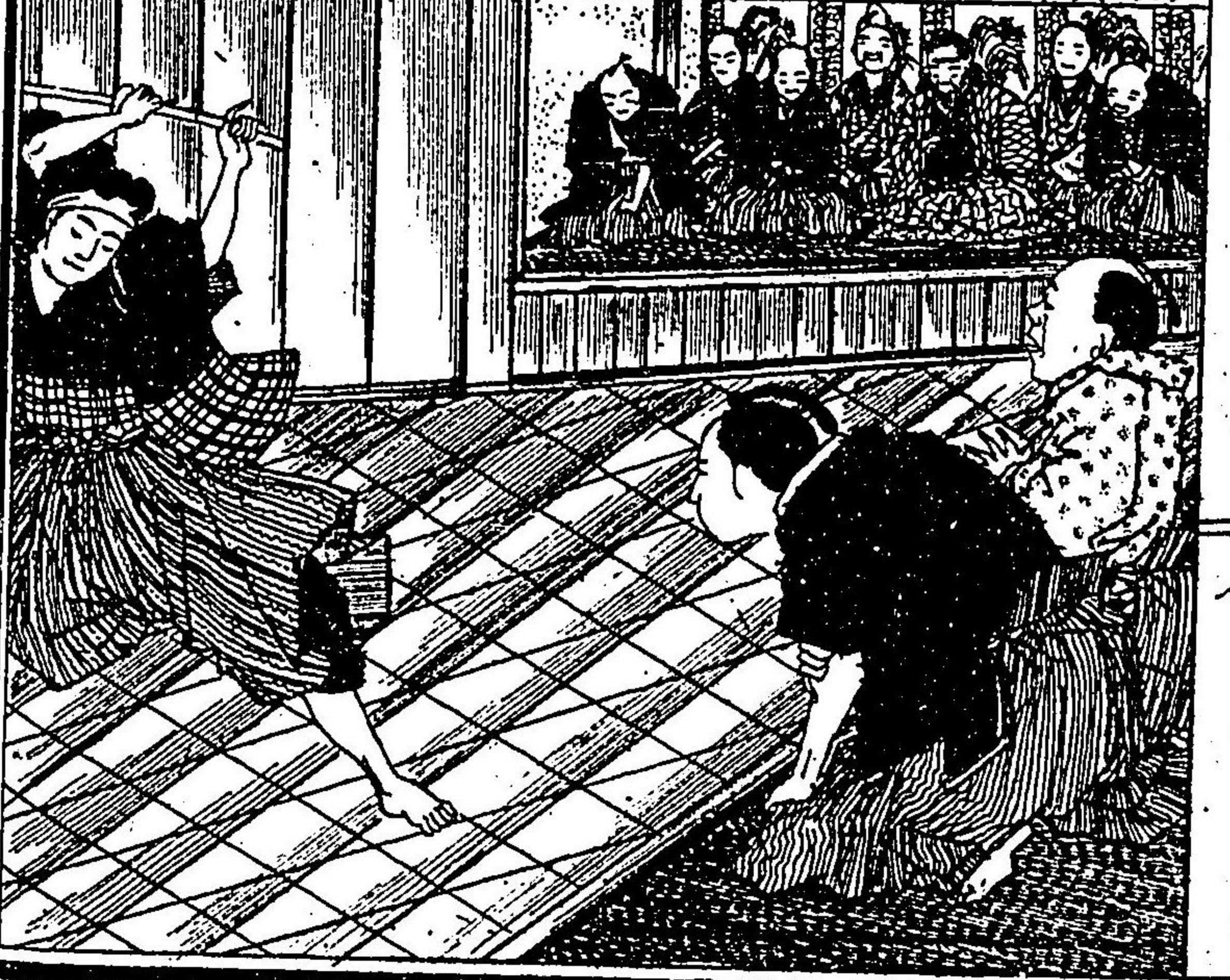
一回 佐野鹿十郎武藝出精るま話  
 夫中古心永年間にせりて古今未曾有の大後  
 能あり茲小監筋を尋ねる小九州ハ肥後ハ  
 代の大守菊池肥後守武胤と云る小頃無双の  
 良將御左ける此菊池殿の藩臣の裡に佐野出  
 羽人清安と云て俸祿二万八千貫を賜ふ菊池  
 四老職の一個も最も文武両道の達人小下熟  
 忠抜群の武士一が此清安も兩個の男子あ  
 り長子ハ佐野主水清國と呼合弟ハ鹿十郎清  
 章と号り同胞共父の器を継て頗る才敏澤  
 量の壯士よて心永三念の頃ハ主水ハ年二  
 十一才ニ既父の家督を相續せしめ父子君  
 用を勉められしが舍弟鹿十郎ハ小齡十八才  
 次男ハバ子舍住よて未だ役祿弱ハ是らば  
 天漂大剛膽勇みて年九才の頃より父よ乞  
 て疾く師を索りて劍道を學び二万八千貫の



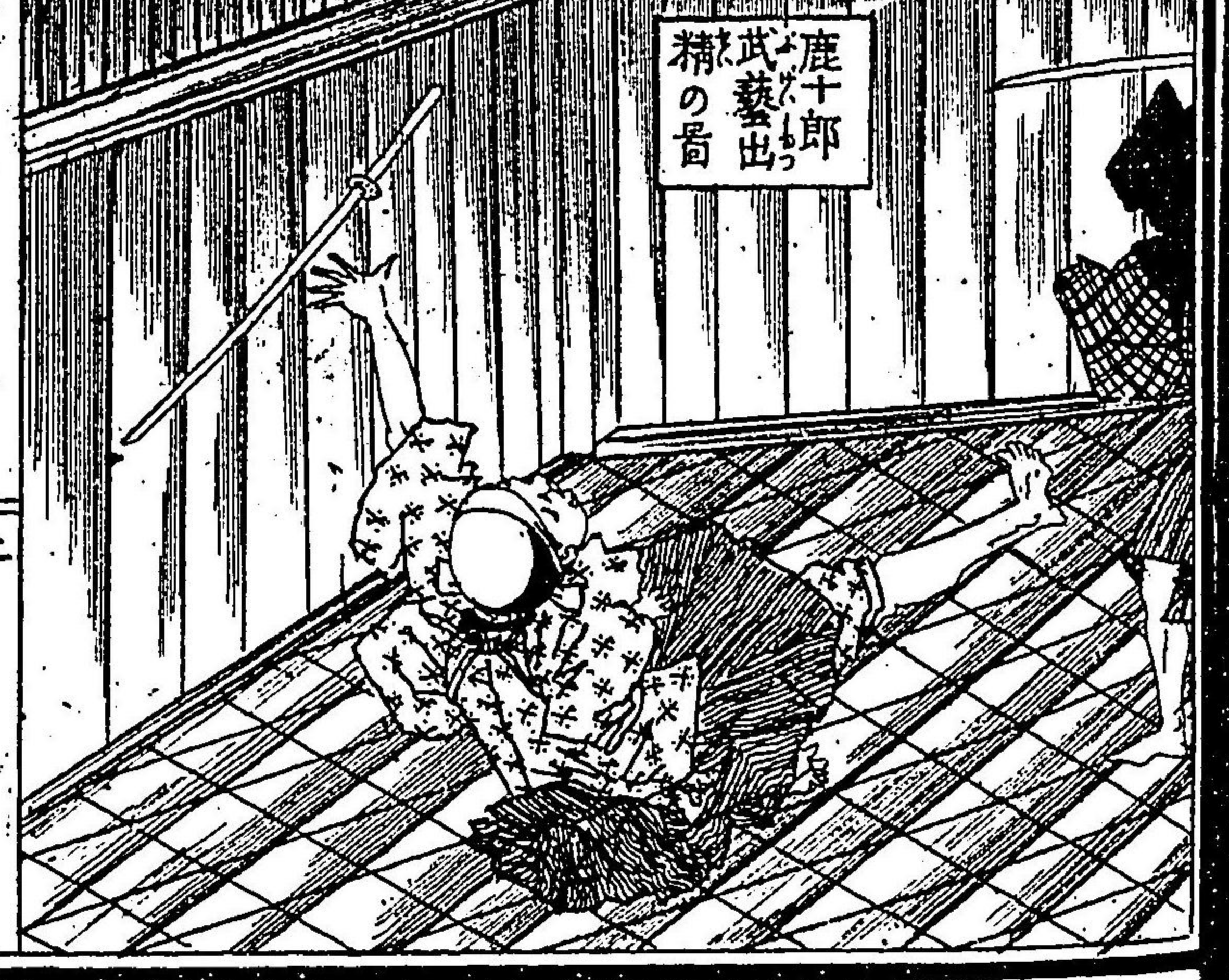
佐野清國家の祝賀の酒宴の圖



息男ありハ近習危儀を相入とあさめ小躬  
を清く懈怠なく誓古出精ぶたりけるま實  
梅檀ハ二葉より芳しく後世名譽の勇士と成  
べきまき交會し少年ハ終二年計りの誓  
古はて介師の流美の奥儀を得たり是彼八重  
垣派と云傳ふ父清安も鹿十郎の器量庵子も  
がらも深く感して孝頼母しく思はれるるら  
鹿十郎ハ倍勵みて自夫武藝の師を替て派儀  
々々を習練せる緯十一才より十四才まで  
十八番の術を習ひ覚へ諸派悉く習ひ得て夫  
々奥を極めしや介間文筆の誓古も  
十四の晩より十六の冬まで兩年の入木道  
入て文武の両道熟練せしぞ夫世間幼童の  
習心処ハ多く文を前し學びてより他誓後よ  
學小を例とす此鹿十郎而已ハ然らぎ武家に  
生る目的の本意ハ弓馬鎗刀を職分として是  
小暗けれハ士とハ云ギ文を以人を訓ゆるハ



治國泰平の規則ハ劍戟を奪て敵を打暴虐を  
制する職分ハ農工商の糺けと等しきや俺  
苟くも佐野が次男ハ那ぞ武藝ヲ疎略せんや  
と憤勵して父ハ断りつゝ徳の如くは前後異  
る人の速ハねき象を示し九才より十四才  
まで小介術得たるも古今例なく菊池一番中  
の評判も成て佐野が一奇子と賞美せられぬ  
干時応永三年三月中旬暖和の時候に向ふ物  
りハ八代城府の裡に於も諸処の寺院神社の  
境内ハ櫻の満花に人挙り合て農工商老若  
男女此期過さずして這処彼処已が様々浮上  
出る小娘ハ八代城府坤の方ハ澤田八幡宮と  
云社あり是ハ豊前國宇佐大神を遷し奉る御  
社とやら近曾社内に櫻木植りて開花に諸人  
脚を運び俱に神徳を仰ぎけれハ佐野が弟の  
家臣們も主水鹿十郎へ是を語りて一日遊覽  
を勧めける小ぞ主水鹿十郎へ許して曰く休



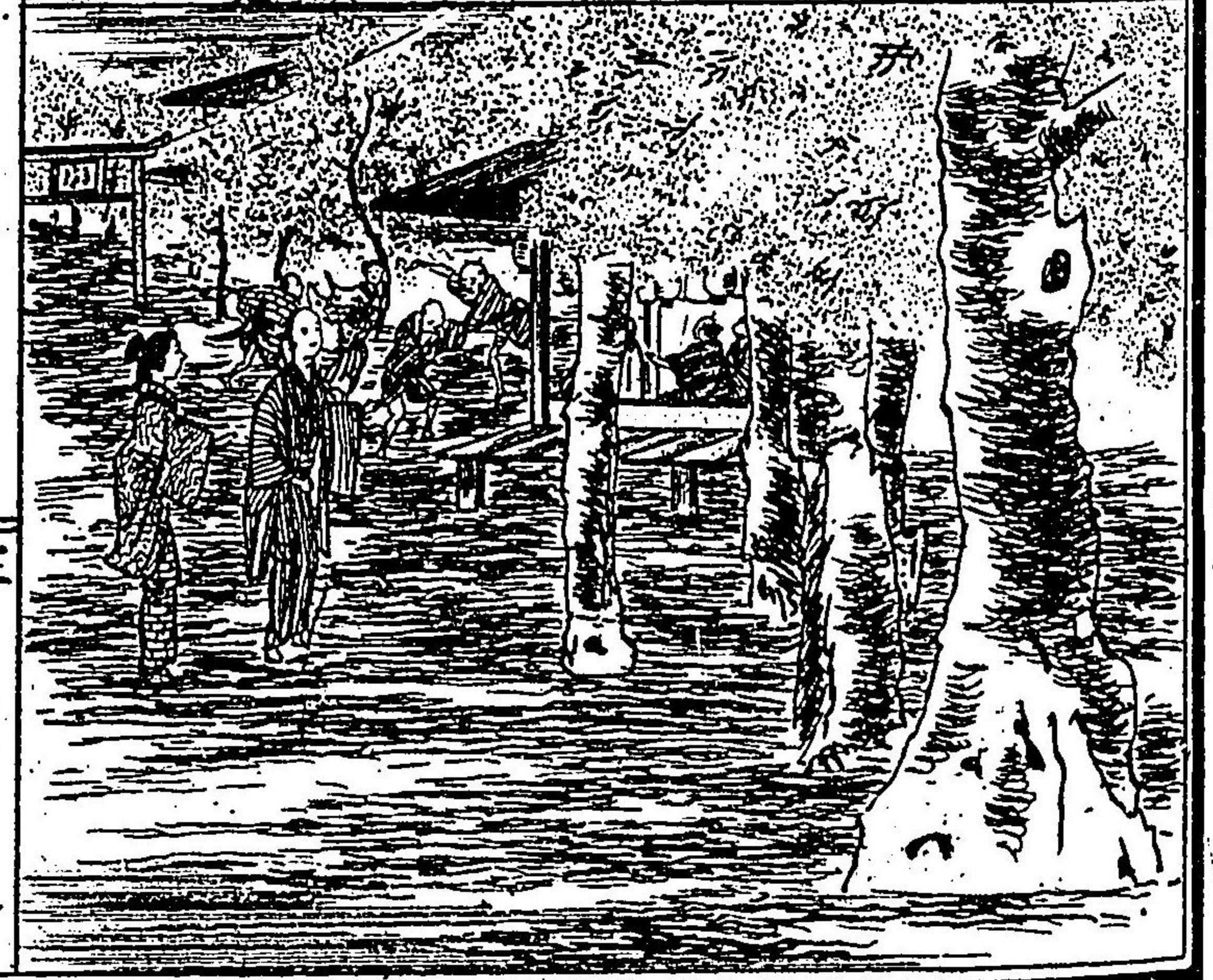


多年武藝小傾き兄は勝りて諸派を極め若  
 年に稀なる上達一菊池家の普士と成絆父兄  
 の射も太面目然かろ過不及と云絆あ  
 り余り一心の徹壞りて却て射の病害を  
 むべし時小保養難散なきも是生命の一術  
 と云バ世櫻の木満花伴僥の見物一家臣の  
 勸めま応一守矢八幡の頂拜兼て澤田へ遊覽  
 に出給へ俺你を同道せんよりハ隨意も一入  
 氣散トあめれ兒の情は説勧めくハ鹿十  
 郎ハ辱一と速て家臣十個をくり従者ト主  
 従羽織袴の着流一若黨奴僕も小筒食菴の  
 途中の調度を齎して毛繒兩具の準備までを  
 打擔がせて氣を出つ澤田八幡宮へ参詣し  
 今を盛の櫻の下ある社内の程能茶店ハ餅ひ  
 主従酒肴を把ひろげて花を瞻りて酔を喝せ  
 巴う得の鹿十郎も帰路を忘ま此花價千金と  
 称へり此時華表の方より一十四五才の



花見遊覧の

一個の少年衣服も垢着たる古布子を躬ま  
 とひり下劣の的一個の老翁介後ハ属て  
 小太鼓を打叩きつ太濁たる声よて云け  
 るハ何方も諸見物御覽せ是ハ洛都誓願寺  
 蛸薬師或ハ四條河原祇園御社内ハ長らく  
 御評伴を蒙り侍上竿枝の尻松と稟して高  
 き処ハバ刀利天廣き地ハ大十世界手  
 代足懸さへ持キ則ハ登り走る絆ハ鳥の如く  
 或ハ一劍の端細度り粉竹棒の端ハ御望ミ次  
 象御見物の天窓の端まて踏と御意さへ蒙  
 る則ハ一來法師の宇治橋あねど飛止りて  
 真逆立ハ尻松が根本の藝術早業ハ般此九州  
 へ罷り下り洛上産の新工夫ハ六本劍の端  
 度り足駄一本齒を指懸て且此処よて御覽  
 入る首尾能度り謀せ一則ハ尻松へ御花と  
 思召てハ幡様の御寮鏡の残り二銅三銅の  
 投附福を夫をき勢とて勉め侍るハ卒太夫





本躬準備せん必き逃給ふと声懸つて早  
 四方群集と成けるまぞ茶店に有ける佐野の  
 主従も鄙珍しき心地あれば是も一奥なる上  
 華妓も金の端を歩行と云ハ能仕覚へたる  
 警衛も人見せんと打談合て茶店の簷の  
 前向なれば群集代見物左右は除させ鹿十郎  
 ハ披首を立て睥睨つて見物それバ家來個  
 ハ主の左右は倉蹲踞て暗めかりり恣て上  
 華妓ハ是ホ小臆せむ件の老翁ハ背負たりし  
 古き葛籠を打開きて刀六腰を拿出しつて百  
 般戯を暗り散りて小き木の切口を六並べ  
 余真中の丸開処へ六の刀を逆立て間二尺  
 計り隣て並べぬ借尻松ハ玉禪懸て右手よ  
 扇子を打開き裏の方を向ひま拿て一本齒の  
 高足駄を履而足廣げて剣上るま躬輕き絆鳥  
 の如く終一二歩の双先を次第くみ剣踏  
 たる一本齒の足駄さへも寸分踏外さぬ余妙



術は諸見物ハ一度は声上りて奇妙く  
 術ハ感心する粹太方おご家臣は命とて青  
 銅五き虎松父子へ拿せければ虎松ハ數度  
 頂戴き頭を地も付て拜謝ふき鹿十郎感美し  
 て云ける様汝今日の世業早らば是なる茶店  
 へ立入べき一俺別は汝へ処望あり花ハ追刺  
 亦々惠まん些疾く仕舞て來るべしと再余義  
 もあゝ悉くバ家臣ハ余面目注して是  
 ハ若殿ハ那思召て乞食同様の卑き目的を  
 別殿召給ふまやと思ひあらず余場は禁めん  
 も奈何と思へバ食打列つて茶店に入元の席  
 も着て稟けるハ殿御一奥ハ侍おられど  
 も右下賤の的再心御招きハ甚だ外聞思く存  
 と奉る殊更人立の此場席よて他見那とをし  
 侍心やらん願ふハ御止り然るべしと衆口て  
 て諫めければ鹿十郎ハ完示打笑汝們外聞思





糸本位野新録

願ひは、俺より前へ帰るべし、俺彼  
 下郎を招く処、ハ、誓術の骨法、聞ん為、二、尊卑を  
 論じて、道を聴き、ハ、諸誓、俱上、達成、上、竿、妓  
 と、雖も、皆、介、師、あり、師、有、則、ハ、必、ギ、法、有、り、法、有  
 則、ハ、術、の、奥、あり、術、の、奥、ハ、必、ギ、妙、あり、介、妙  
 得、る、絆、亦、難、き、哉、汝、們、宗、の、早、き、を、瞬、し、櫻、り、よ  
 人、を、慢、る、絆、二、是、則、ち、僻、と、云、て、無、能、な、階、人  
 一、失、一、能、有、て、善、悪、ハ、論、ギ、ベ、キ、よ、有、や、然  
 捕、姓、尉、正、成、ハ、強、敵、尊、氏、公、を、逐、人、為、よ、泣  
 男、を、謀、計、小、便、ひ、て、勝、利、を、得、り、れ、例、も、あ、り  
 上、竿、妓、と、雖、も、術、の、奥、ハ、武、誓、劍、道、の、奥、と、等、く  
 一、朝、一、夕、と、得、る、べ、き、よ、非、ギ、切、差、琢、摩、の、年、を  
 積、ギ、バ、今、日、渡、世、ハ、到、り、難、く、り、物、別、武、士、の  
 心、得、と、す、る、ハ、劍、道、柔、術、の、両、共、ハ、是、ハ、人、を、伐  
 而、已、の、処、為、よ、非、ギ、已、を、防、ぐ、を、旨、と、お、キ、絆、諸  
 流、の、奥、大、略、然、レ、介、進、退、ハ、飛、術、飛、行、會、筋、の、こ  
 り、一、周、を、旨、と、お、キ、俺、多、年、を、習、練、せ、れ、ど、も、未



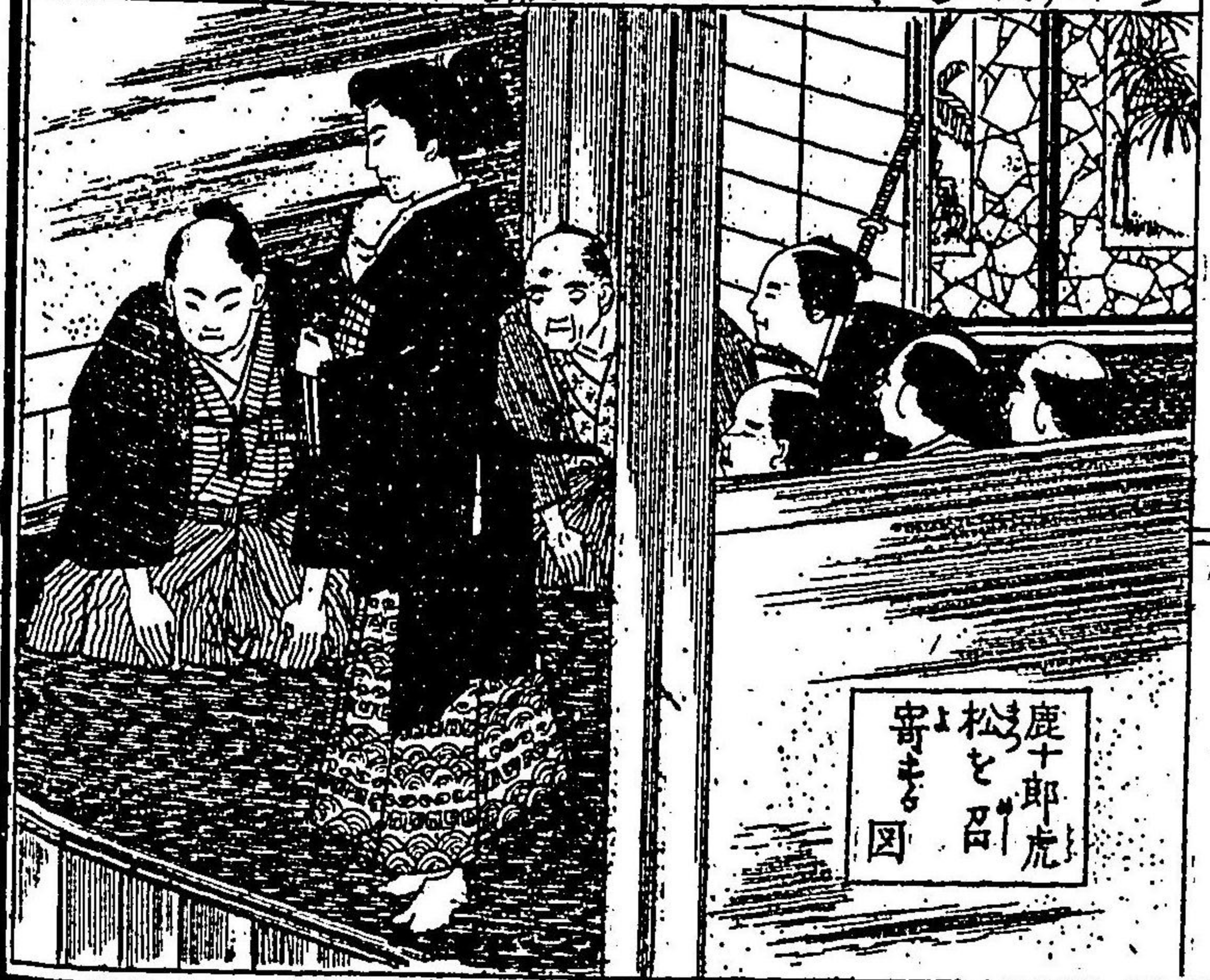
だ、飛、術、飛、行、の、業、を、得、り、是、皆、已、を、防、ぐ、の、法  
 一、須、乎、大、難、危、急、に、臨、む、則、平、日、之、を、熟、練、お  
 人、ハ、死、地、を、出、る、絆、遠、く、へ、く、上、竿、妓、の  
 法、ハ、劍、を、度、る、介、筋、の、こ、ハ、一、則、ち、是、ハ、宗、多  
 年、の、苦、切、を、積、つ、て、絆、十、四、五、才、ま、て、妙、を、極、め、已  
 を、過、親、を、養、ふ、絆、非、人、と、雖、も、手、柄、者、一、錢、二  
 錢、の、人、の、慈、情、も、天、の、冥、感、を、領、ら、ん、人、目  
 止、り、て、恵、む、べ、く、ハ、無、禄、無、賤、の、下、奴、お、れ  
 業、を、興、し、て、唇、を、過、絆、総、て、百、事、難、く、さ  
 る、ハ、お、れ、女、們、尊、卑、を、論、せ、ギ、之、を、顧、へ、俺、の、処  
 作、ハ、渠、も、出、来、ギ、渠、の、処、作、ハ、俺、も、出、来、ギ、世、界  
 の、絆、志、の、如、し、と、理、儀、明、り、ま、説、示、し、け、れ、バ、家  
 臣、們、ハ、念、感、伏、し、て、却、て、頭、を、搔、て、平、伏、し、至、極  
 の、命、せ、と、迷、て、誤、り、たり、恁、て、件、の、上、竿、妓、ハ、由  
 有、義、ある、武、士、主、従、の、招、き、ま、心、急、ぎ、せ、れ、つ  
 早、仕、舞、し、て、兩、個、とも、茶、店、の、裡、へ、入、來、り、小  
 腰、屈、め、て、恁、と、告、れ、バ、鹿、十、郎、ハ、席、を、起、出、て、端



五



近く進んで両個の對ひ、汝們度、世に服空し、  
 らん茶店の亭主支度させ、快く酒飯整め、  
 と指揮する亭主、畏りて別な外面の席に於て、  
 個へ酒飯を運興け、せ、バ、兩個、大きく打飲ひ、  
 て、少刺食事を速ひつゝ、馳て早れ、バ、再び相き、  
 て、鹿十郎、虎松、二間ける、様、俺、処望の條、ハ、余の  
 儀、あ、あ、ギ、汝、今日、の、警術、を、見る、小、聊、武、道、の  
 眼、を、付、る、處、有、射、輕、早、術、の、練、摩、は、於、ハ、殆、感、心、  
 する、粹、些、り、と、抑、此、替、古、ハ、幾、年、習、ふ、や、術、已、  
 得、たる、處、の、自、發、の、妙、意、も、聽、聞、欲、く、恁、別、設、  
 小、招、きた、り、と、打、微、笑、つゝ、尋、ね、け、れ、バ、虎、松、の、些、  
 一、面、を、上、て、那、粹、御、外、望、り、と、存、せ、れ、バ、僕、の、處、  
 爲、替、古、の、次、身、御、尋、ね、を、受、て、耻、い、け、れ、是、は、侍、  
 小、ハ、僕、の、父、ま、て、則、ち、上、竿、技、ま、て、侍、ハ、僕、四、五、  
 才、の、刺、より、して、父、懈、怠、ふ、く、習、ハ、せ、侍、る、且、余、  
 最、初、ハ、逆、立、より、負、計、り、を、習、ひ、懸、次、ま、友、博、り、  
 股、被、き、四、肢、の、遣、方、伸、縮、は、九、四、年、計、り、活、業、

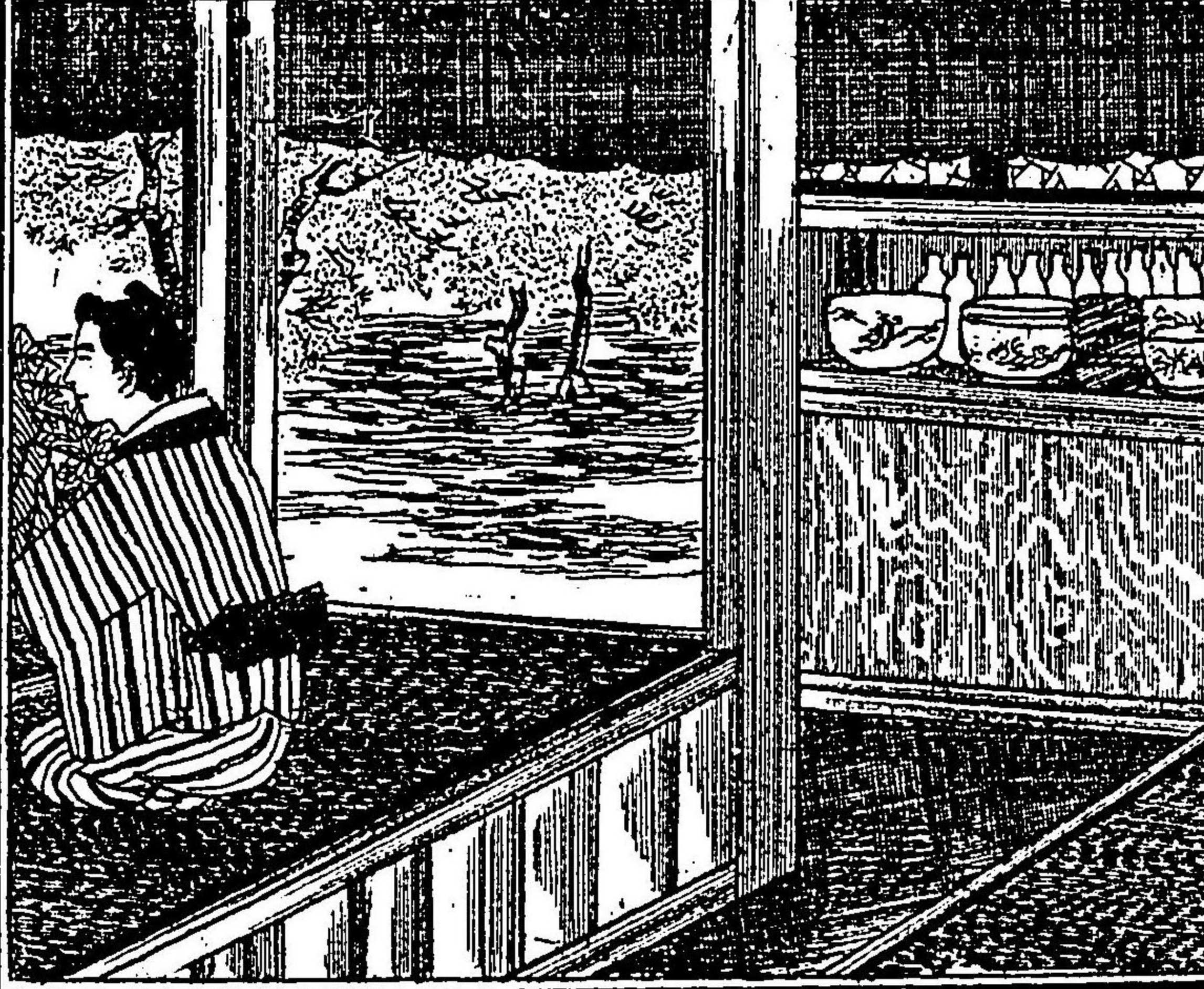


の、中、ハ、父、油、断、か、く、習、ハ、せ、侍、ハ、最、も、幼、年、ハ、育、  
 條、血、條、も、和、ら、なる、故、習、ふ、ハ、心、射、の、自、由、壞、  
 り、侍、ハ、二、曲、特、中、度、り、の、上、竿、技、ハ、右、四、年、の、  
 裡、ハ、覺、へ、侍、ハ、小、借、今、日、活、業、の、外、小、翼、と、察、し、て、  
 別、小、有、ね、バ、毎、日、諸、見、物、の、懷、中、を、杖、よ、力、よ、と、  
 思、小、而、已、を、氣、の、張、合、ハ、勉、め、侍、れ、バ、一、日、替、古、  
 と、云、て、ハ、仕、ら、ざ、り、バ、方、儲、け、の、場、處、仕、損、ま、り、  
 と、思、小、計、り、と、替、古、ハ、侍、ハ、次、小、介、妙、と、察、し、  
 俺、知、ギ、度、を、重、ね、て、昨、日、の、仕、平、均、思、き、粹、ハ、今、  
 日、ハ、躬、平、均、直、し、侍、り、て、一、日、ハ、仕、工、夫、を、更、  
 仕、越、か、く、勉、む、る、様、ハ、油、断、仕、や、侍、ハ、是、ハ、ヤ、  
 俺、が、り、妙、り、と、存、し、外、ハ、意、味、と、て、侍、ハ、キ、  
 と、那、の、粹、ハ、稟、し、け、れ、バ、鹿、十、郎、大、き、く、感、賞、  
 一、汝、の、返、答、妙、論、に、け、り、方、事、懈、怠、ふ、く、勉、む、る、  
 粹、實、ハ、上、達、の、極、意、か、る、へ、し、然、ら、バ、介、躬、輕、早、  
 術、を、以、倘、汝、の、不、意、を、窺、ひ、て、汝、を、討、ま、く、臨、む、  
 則、ハ、平、日、習、練、の、功、を、以、危、急、を、遁、る、粹、ハ、有、





やと問ハ虎松答へける様命セの如く僕も  
 も刃道不心得まハ侍へ共術の徳もて危も  
 むも射を逃る梓容易侍小君疑ハ思  
 召ハ木竹を以僕をハ誥て打まく仕給へ  
 逃退きて御目懸人併ハ兵法は於ハ  
 も心懸致さぬ故僕過失て逃得ざり討居  
 給小梓ハ用捨仕給へ余ハ恐れ奉らざり最  
 丈夫言放ちけれハ勇氣溢れハ鹿十郎ハ之  
 を聞り面白かりて那も時の一奥二けり倅  
 僥此茶店の傍ハ廣芝生の場処着受たり  
 俺と女と逐競べーて云ダ如くよあて遊ハ  
 嗚面白く人と聞へけれハ家臣們ハ之を  
 禁めて非人を相人の遊び処為こぞ父兄君の  
 聞へ思く是而巳ハ御止り給へと倉声窺やう  
 む諫めけれハと鹿十郎ハ一向用ひぎ今日  
 ハ俺遊樂の鳥ニ非除父兄の御聞は達共恩  
 免の鳥は憚り有んや管せ止めおせそと言放



ちけれハ詮方お差和へける意て鹿十郎  
 ハ虎松の云ま衆て茶店を立出場処を者様  
 いて間敷定め定間より外は踏出て逃へり  
 キと約束おて十個の家臣を四方は護らせ  
 細き竹を自ら掌ま金鹿松ハ那も特キハ鹿十  
 郎の後ハ属て双方芝生の場は進み入君御准  
 備能ハ卒逐給へとて云つ脚を踏鳴て面  
 賑然笑ひけるまぞ時節櫻見物の男女も上草  
 妓と武士の人乃那をら茲ま為ものあふんと  
 大勢立集ひて見物する小鹿十郎も酒氣を帯  
 て専奥深く心浮めハ卒と云つ竹根上て虎  
 松ハ打懸り逃出せハ鹿松ハ両手を打振小  
 走る緋風の如ハ限の間敷は逐誥ハ射を繰  
 して後ま走り鹿十郎も脚小乗して逐梓滑り  
 おく越ぎどハ鹿松ハ些も射れず遁与逐誥し  
 と思小時ハ傍の櫻の枝ハ飛着射を逆ま  
 接の如く得たる処の上竿枝射しりハ鹿十郎



虎松  
 父と  
 酒飯を  
 賜る図



たり持たる竹も届き兼て討討に飛乱離  
 と飛てハ亦走り出き九念ふを絆二十四度  
 きも勇氣の鹿十郎も逐走る息断ん  
 て思ハギ之生を打倒れけむ家臣們ハ走り  
 荷て息継茶湯を喫て茶店の裡へ借引入  
 バ見物男女ハ四方へ散たり此時鹿十郎休息  
 して彼虎松を呼て云様實は汝の稟如く飛  
 術飛行駛き入たる俺自今汝の詞を師とし  
 自願して術を學び自然の妙を得つべき物  
 り汝の鑿定奈何と問ハ虎松答へてさん侍小  
 物ハ管キ好む小上り根氣強弱は差別侍小君  
 御壯年まで御在ハ御心懸の堅きま応ト急度  
 御自得仕給小へ僕如きの評する処ハ燕雀  
 大鷲を誘るま似たれど彼義經ハ艘飛の働き  
 も天狗の助勢を受ける小非や偏ハ術の妙まで  
 侍小僕の上竿技を御覽して彼是御賢慮有間  
 欲と云ハ鹿十郎破と掌を柏汝の妙言感る堪



たり噫惜むらくハ蒼齡なるま非人境界は躬  
 を埋キ絆近曾残念の到りこと頻々嗟嘆仕た  
 りけれハ虎松ハ完示打笑ひて是ハ辱ぢき命  
 侍小併徳不徳ハ人間の形勢今日僕の如き  
 的も下さる処の菩薩は於ハ君も下郎も受る  
 絆かく絹布襪禮の品異れども寒暑を凌ぐ  
 ハ別な受や別所ハ一畳の蓆席盛衰の夢ハ絆  
 る五十年然而已祭こと為物侍ハギ五斗俵の  
 為ハ躬を縛るるより足ぬぐちの世間過キハ  
 結句ハ氣安く侍小こと口端利く答へけれ  
 バ鹿十郎倍感心して円金一枚花と遣ハ  
 終る取拿して去せける早鳥も面ハ打傾けハ  
 鹿十郎ハ家臣を引卒俺弟へと立帰りける  
 二回 佐野鹿十郎狂乱家出奔の話  
 然程ハ佐野鹿十郎清章ハ匹夫下劣の一言ハ  
 れ共虎松の論辯を是として將稟の躬の早術  
 ま心憤厥ハ武警ハ把てハ飛行の進退死地強



鹿十郎虎  
 松が技藝  
 を試す大  
 感する因







人渡十郎飛入と見るより水中まで無手を抱  
差深水の方へ扯込んとて佐野の奴僕も是を  
見るより那ういふ少いも構へべき主人の大事  
と思ふゆゑ俱小丸を成て飛入つて主従  
水練得たりければ水を奢りて傍に近所鹿十  
郎を抱き止めて浮き上りんと奇りければ奥  
村の奴僕八鹿十郎を一向深水へ扯込んとて  
双方左右へ廻り奴僕を鹿十郎八郎を組れお  
ろけ抜きを切て水を掻き水上に浮き出ると  
等々奥村の奴僕漢子の帯を斤量と取り  
者へ必ぎ控杖させ給ふと叫びあぐりよ一  
間計りの高見と成たる岸の上へ蓋敷ハ此大  
男の処為よ心の奸計組解けれ共奴僕助け  
を上表す飲ひ心得たりと声を懸て故上る奴  
僕を丁と受止着續きて水を吐しも故意明り  
懸し一音へまければ鹿十郎ハ已が奴僕を浮



むと等く遊ぐせうし岸の方へ道の上を  
て介助ハ彼より遊ぎ上れり馳て双方野を  
ひらき鹿十郎ハ衣服を着て蓋敷と對ひて菓  
子兼當今水中にて心得難きハ御達の奴僕  
漢子ハ其深を抱き留めて水上に浮き上ると  
そよ果尚某を水底の方へ扯込んとて浮き  
せよ某奴僕ハ扯上るとかそ水中の処為奴僕  
と思へ共助け入たる某おれハ御達の奴僕  
ハ死人同前鹿十郎は打棄すべき物と那野  
深水へ扯込んとせしや一言同明り給はるべ  
しと些し怒りを合せて菓分けの蓋敷ハ心  
程敬き恐れ夫ハ亦不屈ある下郎の奉止那  
共仕仕るは調ハもい給へと誤りつて  
奴僕を打懸しや汁過失て水中に陸込佐野  
氏の助けを得るがう那野水中にて野の自由  
をそるや不埒至極へと放圖つて辱物と以介  
意を知り疾く舵をやら言ければ奴僕ハ一向



蓋敷 鹿十郎 を誘ひ 行つて



地は平伏て水中横損上下を覚へて備は御免  
 起仰せ奉ると躬を勤し一俣入れれば重載も  
 傾き誤りけるも千鹿十郎ハ強ても咎めず双  
 方怪我を分ければ機嫌を和らげ漢遊も之を早  
 りとて双方同道して帰りけるも重載ハ整  
 の処為より奸計仕損じて頸れんと一奴僕小  
 介罪被けたりと今日鹿十郎水中の働き高  
 見の岸へ水上より一人技上たる余力量る  
 倉邑の遠バざるを察て密に後指して居ける  
 とくや然るも佐野鹿十郎は於ハ今日八代川  
 より帰りにて後益可風邪の心持と打掛けも  
 忽ち彼身大熱往来一食事も止て熱氣を起さ  
 り只言ひ吐て病味は肝の父母同胞の人々  
 ハ深く敬きて臥室を離れず夜食を罷りて者病  
 けるまは己は半月計り打過る則風邪の熱ハ漸  
 治りては此時より鹿十郎ハ父母同胞  
 の間も覚へて親族家人の誰某も知れぬ



怒り狂ひて人を逐ひ或ハ笑ひのめきて  
 走り廻り昼夜の分ちあひ暮る程は中上下  
 男女の輩ハ是ハ若殿ハ物の怪者ハ嘘言  
 ハーヤと眉を擡めて食せる中も嘆きけ  
 るハ父佐野清平兄の主水ハ亦ハ一層の美を  
 嘆きて名匠を迎へて診察を全く外邪の熱  
 氣ハ誘引五臟傳例して治らざれば狂乱の病と  
 もりぬ夫て執陳じてハ有ぞと云ふ尚余医家  
 急りありし鹿十郎天稟膽勇ハ八角  
 刀鍔長刀を奪て打亮く一暴んとするも父  
 母同胞ハ大まに恐れて絶て武器の類を秘し  
 収め昼夜五個宛家人を附添番外固く飛出人  
 とするを守衛を属て把鏡めける一時父母  
 兄三個の人々ハ鹿十郎の傍に守集ひ父清平  
 許し諭し十日くお菊も弓矢の家を生れ  
 四民の長たる躬小有る狂念桑て人事  
 を忘れ父母同胞をも辨せざるハ武士の躬



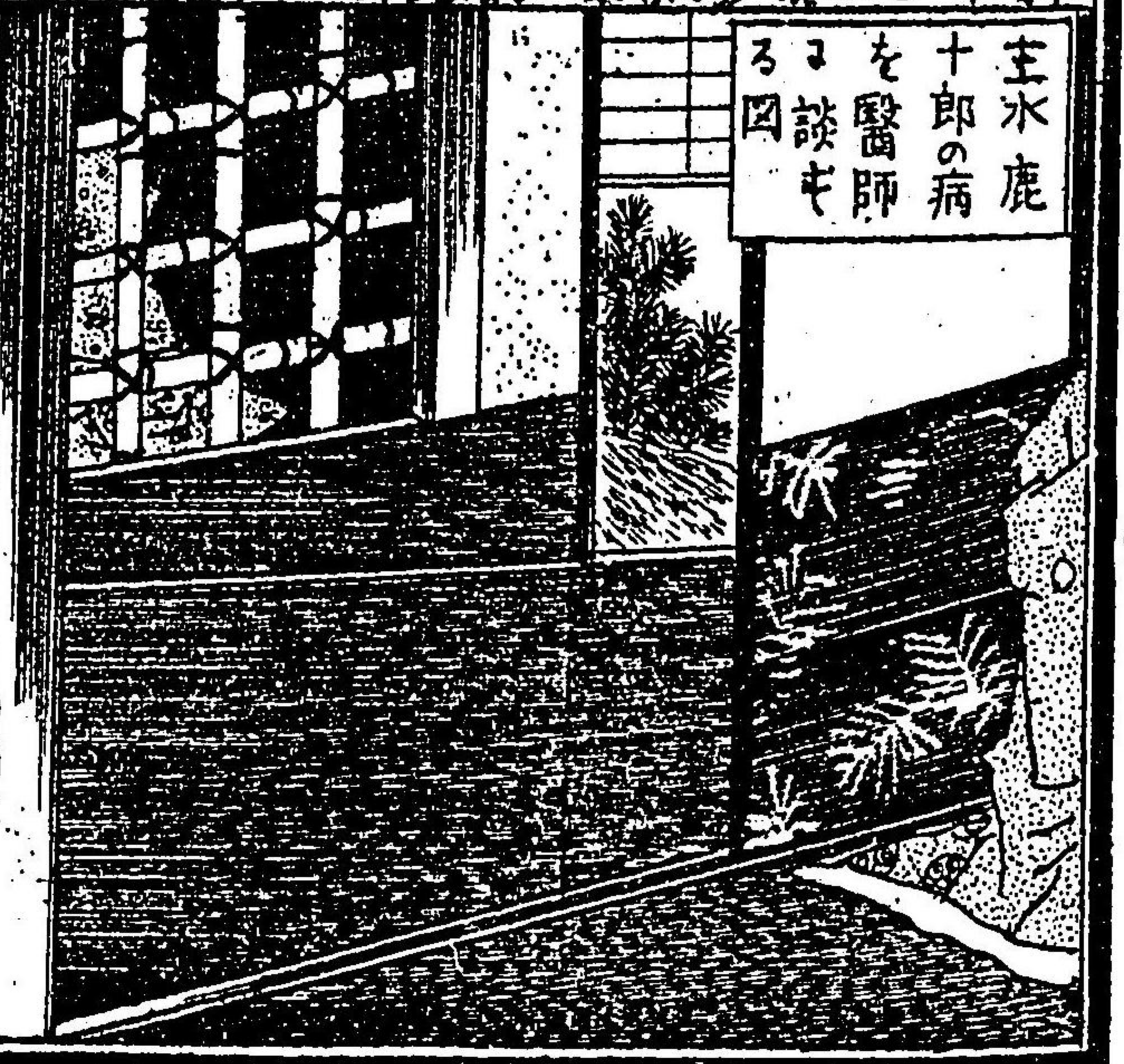


ハ野出羽介ハ况や菊池肥後守殿藩臣佐野出羽介の孩児あらそや汝九才より劍道を傾き諸派悉く奥を極め人の賞譽を懸りし財にて一心終る病の爲に博例をそそ見苦しけれ且能心を押鎮めて往事勤辨ハ付ざるもやと云ハ慈母秋篠と云も諭して曰くやは渡十郎能開ぬら一幸ハ你を産儲けたる慈母秋篠を侍るぞよ是在ハ你的兄ある主水着國を能知りゆく二万八千貫の家産狂乱狂人成果了一孝へ大守へハ不忠あるそ次ハ父君へハ不孝へ慈母や同胞ハ耻辱を受て家人の的も笑ハるべし武士ハ物も動せぬ少へ劍を以魂と呼ハ你病歎を退治さそへき意の劍射を添るハ今慈母の詞能く解して病癒自ら除ひ拾へと恩愛切なる心を竭して詞静に説聞ハ共鹿十郎ハ耳も入らず朝笑ひつて父母を貽付汝們ハ乍屋那方の的ぞ俺



主水鹿十郎の病を醫師と談むる因

ハ佐野出羽介ハ二男たる鹿十郎清華ハ侍武道の弓馬鎗刀ハ格ハ得二十人ハ負まじ武士あるを那論せんとして面なるそや座を殿巡やつと救國ハ父母同胞も只長嘆して専愁ひま沈み入りけり是偏ハ勇氣抜群の天稟より物も徹堅む心の勞まで引出したる病症もれハ頻に治そべき容子も皆へぞ曾醫藥の外ハ加特新禱し神佛冥助を願ひたりけり借も奥村善藏ハ鹿十郎の狂乱と聴より心奪り打笑ひて一日介病氣見舞として佐野ハ小入来りつて介病室に打通りて附人ハ容子を問ふと一別の疎意を断りけりハ鹿十郎ハ善藏を看て大きき怒りて丁と貽付て汝俺をハ代川まで溺死させんと謀る処ハ奴僕之處爲まで明白ハ察那面目有て俺目條り推忖せし子膽太し儲方ハの勝負を望まば俺頃日腕の疼く最中へ投擲して得さそへ



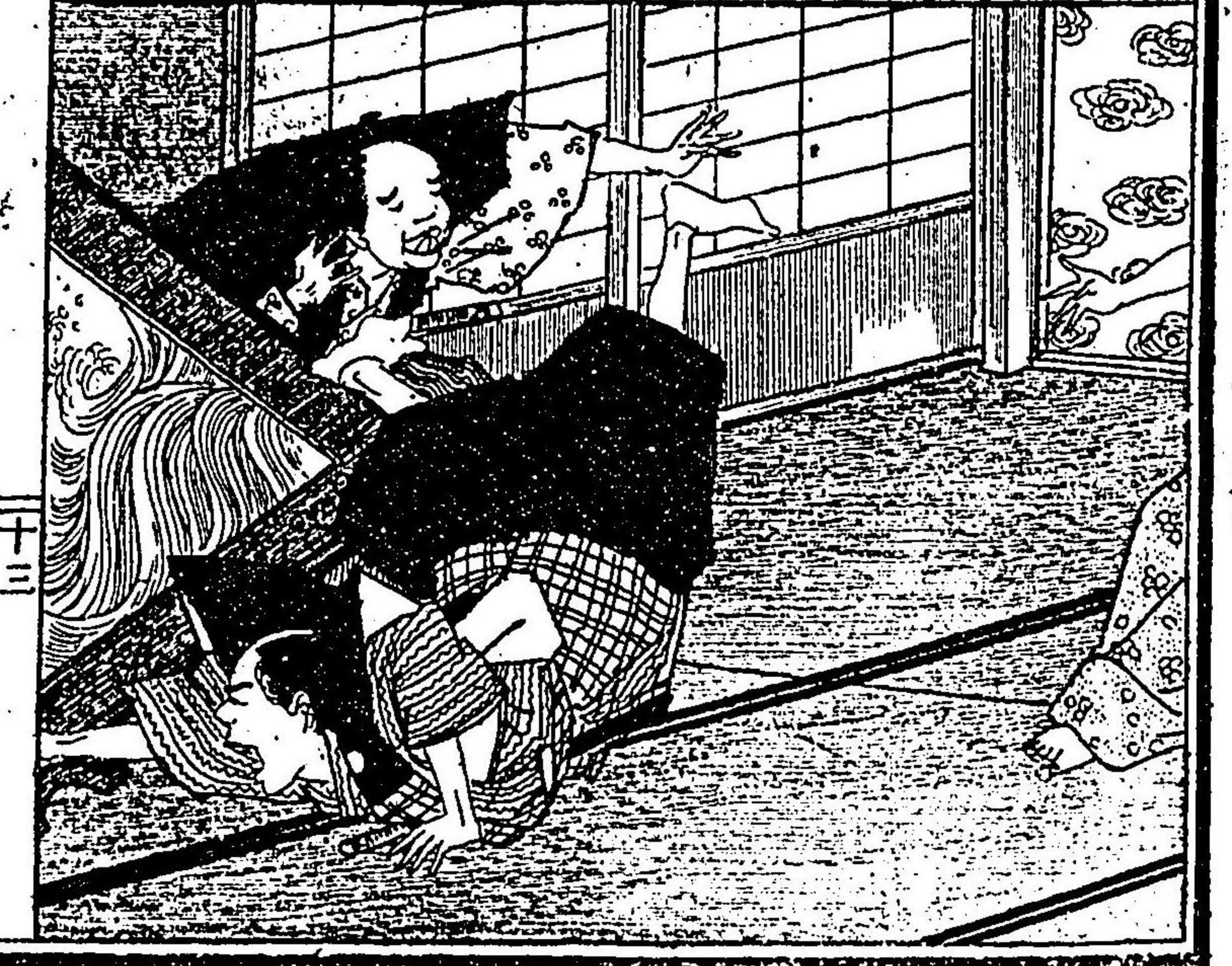


きやと罵り駈せ飛脚でけりバ家臣の附人  
 把支するは鹿十郎ハ食料飛脚で臺藏の御  
 接相にて引被きて二間計り室の紙門の隙へ  
 投着たり固より無双の大力の上は狂氣カヤ  
 カかりたりけん臺藏ハ豹子を投する如く  
 計を打て例れ伏撃時ハ起ゆ上りたりけり此  
 時兄主水ハ走り出て急な臺藏を助け起し百  
 枚射り危て云様是ハ存外の無礼仕り侍小万  
 乞恩弟病者マ免して愚外の狼籍怒させ給へ  
 と低頭をして誤りけれハ臺藏ハ健腰骨打て  
 頬を被面痛ミを恐ひ急な起聲得たりけれ  
 バ主水ハ己が轎の裡へ臺藏を助け乗て自  
 ら轎を属て同道一奥村の果は越きつ大炊  
 元房へ轉末を語り駈々住言述て誤りけれハ  
 元房も病者の処為し人憤りもあく會釋して  
 主水ハ無事立帰りける實鹿十郎狂乱  
 も臺藏の奸計を心の底深く憤り居ける物



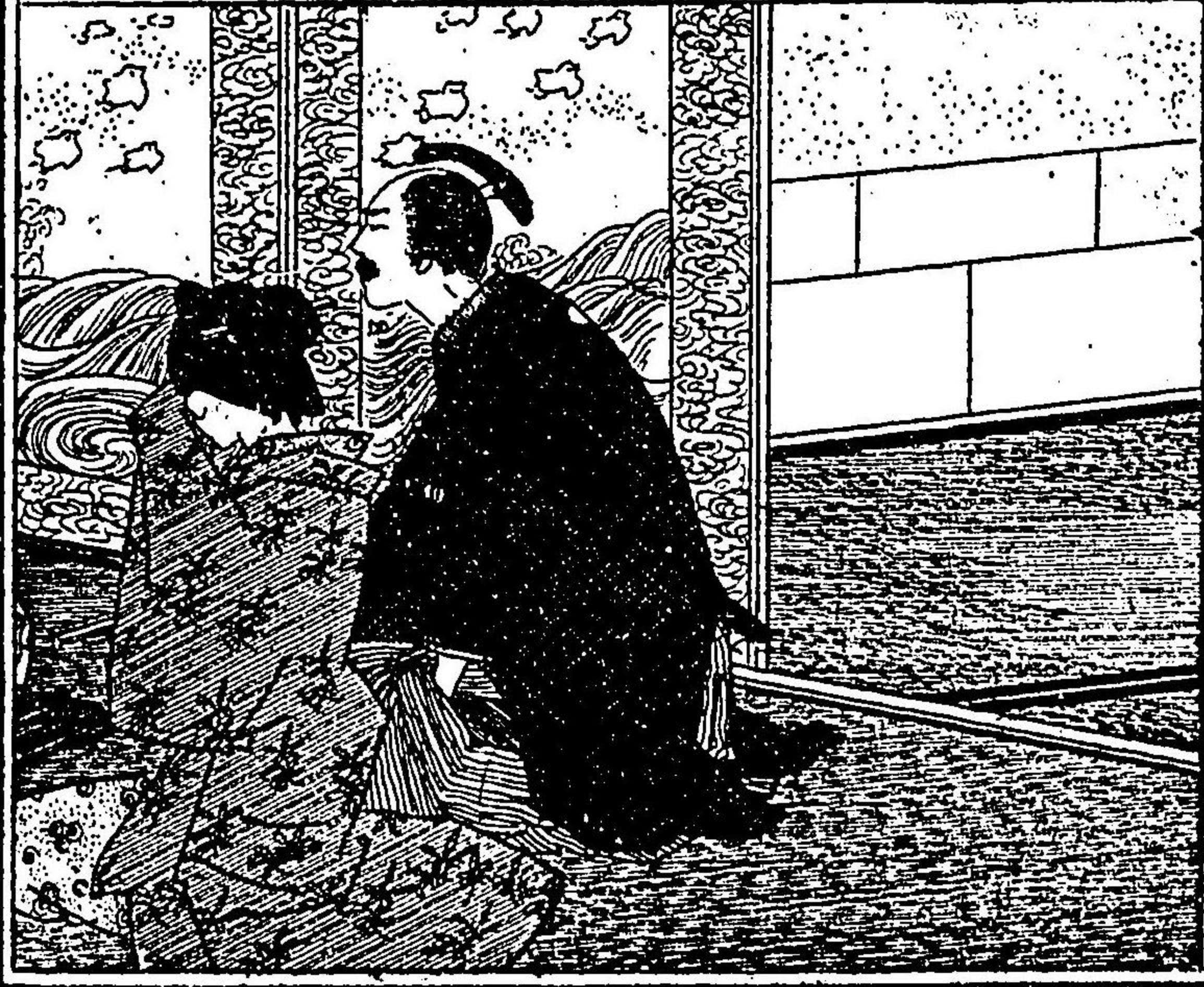
鹿十郎 臺藏を 投付る

まや狂念より余面を看て正氣あつた怒り  
 を発し自然と怒ミを晴しける緯臺藏而已心  
 と思ひ的り渠奴狂氣ハ偽まりて實ハ病マ  
 託け此鬱憤を俺へ報せし物ありんく独心  
 恐れ居けるが尚鹿十郎の容子を聴き狂乱  
 日を追て倍烈しく頃日ハ一室は竹竿を設け  
 些も外へハ出さばと云ふ臺藏も茲に到りて  
 原來實姓狂氣にけり併俺奸計を察し居こと  
 神通得たる才子とて舌を動ひて感しける  
 と自然程は再佐野が家ハ鹿十郎の狂病強  
 くて上下共は特餘しけれハ終は竹竿を構へ  
 てきびしく閉籠二便所也も裡小整へ三度の  
 食給仕してハ主水自ら膳部を運び食物能  
 毒撰三整へ別て父母の愛子ある故兄も兩親  
 へ孝行の為は多くの召仕ひも打仕せし他  
 りて給仕せしけれハ兄の至實通る処カ  
 狂念暴行の鹿十郎も食事も對へハ大人しく





して余言辭而已差ひけれと争ひ狂い外爲せ  
 ざりけれハ兄の主水ハ諾老實ま小見へ物を  
 喰まが如く心竭して押擬ひけれハ兄は對ひ  
 てハ恠る病者も大きき速慮して容神妙之主  
 水一時鹿十郎は對ひ你能俺をバ知りや乍麼  
 此方を誰より者給ふと云鹿十郎主水の面を  
 瞻めて御遣ハ則ち人間と思へりもや妖怪  
 變化までハ有ま主水破乱しと涙を流し  
 你骨肉の兄を看忘れ父母をも忘れハ那粹  
 そや今年總十八才少して武名世は拳べき替  
 あるな世の癡人となるハ浅猿しけれ佐野  
 家は生れ來おがら父母同胞を看忘れてハ未  
 代俺家の耻辱あるぞ迫てハ親同胞の分別  
 ても心静めて思慮せらるると言葉知らるふ  
 喻し聞けれハ鹿十郎ハげく打笑ひ夫ハ  
 稟さる迫も侍ハ九生と活る目的ハ父母  
 の無的ハ侍ハぐく亦人信有ハ四海兄弟の



知信無人ハ兄策他人の元鹿十郎ハ佐野  
 出羽介と云菊池一老臣の父侍ハ子として  
 父母同胞を忘る争世界は侍いべきやハ主  
 水大きき飲ひて曰く你正氣を心見へハ  
 どもや俺をハ看忘れま鹿十郎再答へて曰  
 く御遣ハ俺を看給ふ慈母秋篠様ハ御在へ  
 夫や澤田八幡宮で着つる上竿妓の  
 虎松あるん本齒の足駄を履て劍の尖を  
 ハ刺越たる奇妙の術こそ目覚つり卒々  
 此處まで俺は看せよ花遣ハまべと云けれ  
 主水ハ声放つて打哭つ二言の間答はく  
 座を立けり此爲体ハ父出羽介夫婦ハ途方  
 着て哭外ハ亦或時ハ竹竿の裡まで独踊  
 り別て飛歩行元來好る飛術の執心此時まで  
 も止絆るて罕程暴廻りて家鳴ふせり附  
 人の家臣ハ四方ハ衝りて損ざる処ハ修養を  
 加へ迷惑云様も有さりける頃ハ應承三

母の秋篠様  
 兄主水狂病  
 を宥めんと  
 して却て  
 鹿十郎語を  
 聞き哀し因





年の終十二月三日の夜の緯なり。今夜ハ  
 別て風雨烈しく戸障子までも鳴りきて物音  
 凄しき夜と成ける。附人にも雨夜の緯ハへ  
 多く油断ありて熟睡したり鹿十郎ハ狂氣の  
 心より此物音は咬されけん怒り怒り怒り  
 狂ひ出し得たる射輕の早術以竹拾子ハ脚  
 ミ懸て天井板を打外へ二階敷を引破  
 て衝と飛上りて窓の方のうらまひ悉く引破  
 り兼小家根傳ひは地は飛下り弟若戸方の高  
 敷有を打着りて走出りけるが一條の沓の境  
 へ上り東を指て脚は任一狂氣の物せもなく  
 余射ハ雨風まひた濡て愈肝氣振たそ病の毒  
 も俺ハ氣着ぬ聞の磔生得勇烈の壯士あり  
 走るを面白くや思ひたりけん天よ走れる雲  
 の行方と共に定めぬ落着所親同胞の後の嘆  
 きも夢幻なる病の仇は逐れ逐る夜の道を  
 終夜息も絶や走りけるが既十里余り



鹿十郎狂  
 病の為め  
 我家を抜  
 け出る回

り行に茲は同國隈本の郷なる志水と云る風  
 村まで到る共知を着けれども已ハ絶て那里  
 と寛へギ余射も大く榮れたりけん志水の村  
 稍落の郊原ありて礎と目測れて地を枕と  
 高軒擡て卧居たりける噫是奈何なる因縁ぞ  
 や筑紫の名家菊池の藩臣二万八千貫の一老  
 職佐野出羽介の次男と生れ數多家臣の主將  
 の射も病の處為家を奔りて茲は野外の港  
 へ射とハ昨日の榮花今日の零落一夜は貧福  
 處を異る幸不幸の様天命と雖と諦め難き  
 轉珠はあふもや早境鹿十郎が後の射の上際  
 何ある話よ到るや否や夫ハ次々の回よ説分

三回 浮田傳五右エ門旗中狂人を救ふ

話

却説佐野出羽介の家ハ上下恣と八夢小  
 泉着ぎ翌朝兄の主水ハ鹿十郎へ朝飯を喰

繪本 佐野幸義





せんとい別室へ來りて視れは是ハ奈何竹格  
 子の裡ハ天井板二階敷着重りて主ハ空蟬  
 の後をも留めぎ風雨ハ既ハ鎮りたれ共呼と  
 蒼ふる音も無りき主水ハ仰天賦忙して番  
 漏つる家臣を呼立還し尋ね問けるは食管  
 駭く而己探そ外なき急ぎ二階へ登り向小を  
 看れば窓のくりま引放ちて脱出たる様者  
 へふけれハ食々是ハ奈何せん狼狽廻る主  
 水ハ憤然と罵りて曰く汝們主命を疎略し  
 て活者の番を羨りりあぐり彼解怠勝りて奔  
 り出せ後悔なきとて速いへきや不届き至極  
 の的們うる疾く部索一探さキヤと敦因暴  
 く罵怒を父出羽介ハ那緯まやと已く空  
 より出來りて容子を聴り大きき駭き長噴  
 一云ける様ハや主水家臣を咎りませ  
 こそ是皆宿世の業報もん噫天ある哉と嘆息  
 一奴僕を呼集へハ方部索一尋ねさ



せけり茲ハ譜代の家標の中ハ仙八と云る  
 有けるに至て忠直律義の壯士みて主人出羽  
 介の心は協ひ戰場も度々召卒たり仙八ハ  
 此時駭く中も脊戸方の藪ニそ懸りし  
 り入つ探し視る小孫若竹踏例して一條  
 の道を開くが如し仙八偕ニそ道を傳ひ前  
 向の川岸まで到りけるは是を願ひ手係り  
 なく立歸りて主人へ告ぬ出羽介心は思惟様  
 ハ誠や世ハ泰翁の駒と云俺子もがも鹿十  
 郎ハ天晴一個の英雄と親の欲目も樂三ヶ  
 るま不測の業病ハ把合し今や恠る騷動を  
 仕出し生死不定の夙説懸るハ必定脊戸の  
 武川ハ陸込時昔の風雨ハ水炭倍たる介水勢  
 小押流されて尙ハ弱死をなげけるなん  
 正氣の時ハ是ホの川ハ渠流ぎ上る易け  
 共那を云も病舎れハ平生の処作ハ  
 等しゅうやや夏ハ代川の河越ひるし伝なん



出羽介 家臣 網を以て 川中を探 する命



病症引出せしハ使表厚き人傷めまじく病根を  
 ま焼まぬ心氣の勞れり今ハ生中己ら病根を  
 む破滅の災釀したりけり跡は残りし親同  
 胞有共知で死を前して真途を浮りて悔ミ  
 やせん借も不便の緯一てけりし親の思ひそ  
 の悲嘆ハ恩愛の別れは勝断如く親の思ひそ  
 切なりけりける出羽介漸心把直し仙ハ命  
 て云ける様ハ汝大儀ながら下は到り浅深  
 を計つて綱を下し水中得与深し具ハ淹重  
 りハ此川の中を過失て陸込と思ひ疾探せ  
 ゃやと言度せハ仙ハ只顧泪を浮めて命せ  
 ん得て侍心へと準備把急きて綱を携へ以候  
 兩三個引卒つ川方を指て支出一ける右左  
 噪け共仙八們ハ手を空立歸るるぞ出羽介  
 ハ一向悲ミて原來海方へ流れたる小や哀れ  
 べしとて厥ちハ普佛事供養ハ夫婦親子  
 共力なく世に故的と思ひ詰て後恨るる



子吊ひけり然ハ狂乱より出で歸らぬ鹿十郎  
 出射の上おれハ誰れ小存命とハ思ひ的  
 出し鳥を命日と思ひ絶ハ太理りるも哀れ  
 なりけり然程は亦佐野鹿十郎ハ同國隈本の  
 志水村ある野辺の街端小倒れ伏て翌朝己の  
 列項まで前後分たぎ居たりし地の農夫  
 們耕み出んと四五個列小て鋤振擔げ此処  
 へと來懸りつ着れハ若き壯士の髪も蓬  
 へ振乱して着たる衣服も尼塗ま成素脚  
 て裾も擦げ未だ高軒換て卧ける小ぞ食不  
 審思小物く呼覚して尋ねありし前後  
 小倚たりて評し居る追々農持きの男們兩  
 個三個と立挙りて此時己ハ大勢と成し  
 奮うやと喚き居る前立たる農夫們  
 ハ鹿十郎を呼覚しけれハむくくと起て大  
 欠をなし眼を摺あが左右を看傳り大き  
 怒りて云ける様ハ汝們那とて恣無礼をな





や俺を誰とら思ふん日本鎮西よ去の有り  
 呼れたる天下無双の大勇士たる佐野出羽  
 二男鹿十郎へ俺と思ひ人的も有卒守て組  
 やと大音罵り仁王立よそ衛立上る農夫們  
 一同高笑ひし此奴今速つる、經文よやさ  
 りり解せざる絆を云ハ原來押着り抓着り  
 なんどの刃よ於尿まてもひり懸し故の嗚呼  
 ある的り向くハ亦追放しの狂氣もんぞる  
 打棄置と朝ミ笑へハ若方の農夫們面白がり  
 て狂氣あふバ疾引捕へて酒の替りの狂氣水  
 葉坪の中を嗽らせよと掌よく棒追金て討  
 て懸るを鹿十郎着るより打笑ひ優き雑兵  
 們的拳止らな鐵棒とハ太面白く卒や俺本  
 事を知せん進三寄來る農夫の拿つる棒を  
 破と列返して右より撃込を引外し左へ電く  
 棒を落りつ空に成つる掌下を相みて金剛力  
 よ縊上げれば痛きは恐くね把落きを得たり



と拾ひて振廻し一撃下せば五体漆る、不双  
 の大カせる任せ立地六七個撃倒せし、  
 介勢は倉壁易して是ハギさまの狂氣や  
 虚と慢り疾を受るも除や圍り悶きける時  
 此處へ來懸る人ハ年齢五十七ハの武士  
 るて一僕供したる根装束のぶつき羽織  
 脚伴甲懸杖笠拿て通り懸れり農夫們的  
 居けるより那絆あふんと尋ねければ農夫  
 們ハ形の如く告まける此武士聽て打點頭  
 笠脱て僕も特七鹿十郎の傍へ立侍てや、  
 士よく聴わく、茲ハ往還の野辺なれば双方  
 地の騒動と成てハ自他の射の上宜しがるま  
 じ者れハ人品も卑しく、由緒有人の子息  
 りん某思惟仔細も有、此方へ將取りて  
 姑く留め畜らんが、你的外も有やと物  
 口らうよ尋ね問ハ此時鹿十郎面を和らけて  
 貴殿の様は曰小則ハ然の三服も立票さぬ



傳五右衛門鹿十郎は食物を与ふ



俺ハ今年十八才まで武術ハ諸流皆習練せり  
 と云を彼武士打微笑つて否介術をバ聴み  
 非キ乍麼你の任処ハ那首ちりやと問ハ鹿十  
 郎ハ打笑ひ然バ俺來る處を知らぬ  
 ハ亦帰る路も頗る遠ヘモ夫より陸地  
 り出し雨風は誘引茲は卧たれバ此雜兵們  
 二子兼知ならん渠們へ尋ね給へと云放ちて  
 介終ころりと横ニ卧て手枕をして寝懸けれ  
 バ彼武士笑を含めて打点頭正根忘る人の  
 住処を尋ね問ハ此方誤りハ那分且同道し  
 下歸らん俸僂日中飯の料も結させし割籠を  
 根舞得さきべし此方來られんと列立て傍  
 の茶店へ借引つて食物逆手て馳り愁世  
 ん鬼ハ無物へけり抑此武士奈何ある人と云  
 二四國ハ阿州祥瑞の大守也時足利の執權職  
 音川右京大夫頼元の藩臣俸録五百貫を賜ふ  
 處の殿御師範番を勉めり浮田傳五右工



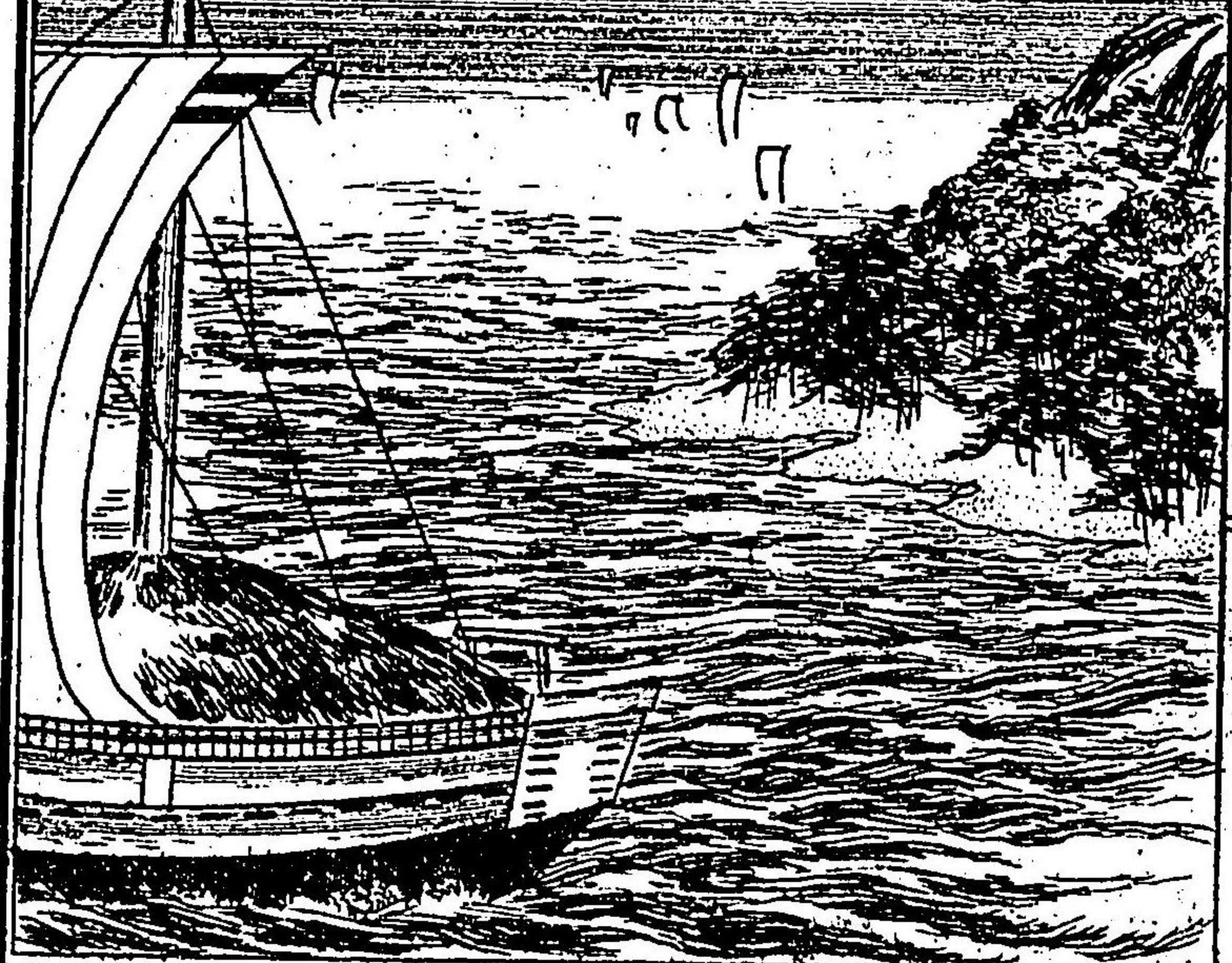
傳五右工門  
 鹿十郎を  
 連き歸る  
 為其由を  
 人々告  
 る因

門正晴と云人ハ世般主人へ頼ひ上て肥後國  
 阿蘇嶽始め豊前國彦山權現亦ハ筑紫太宰  
 府の天神などへ参詣せましく思ひ立て遙々四  
 國路より渡海ありて已ま夫々詣り序み此辺  
 の様一見せんとして世處へ則ち來るへける  
 傳五右工門頗る仁義尊く貧苦病者の的と看  
 られハ平生是を憐むものり鹿十郎の躬の  
 爲体を看て憐ハ救はる處なるべし此時浮田  
 傳五右工門ハ大勢の農夫を呼集へ你達尙此  
 壯士出處を知由有ハ告給へと云農夫ハ食  
 々知ぎと答ふ傳五右工門再ねて云様此壯士  
 の容を視るも甚人品も能且美男子へ着たる  
 小袖も平民の如く如何も由緒有武士と思  
 へる俺ハ四國阿州祥瑞城の藩臣浮田傳五右  
 工門と云武士ハ譯有て今日罷り通る然るも  
 此壯士狂氣病の爲何國の人とハ知されと  
 も余り不便者受る故棄置れを思ふを以

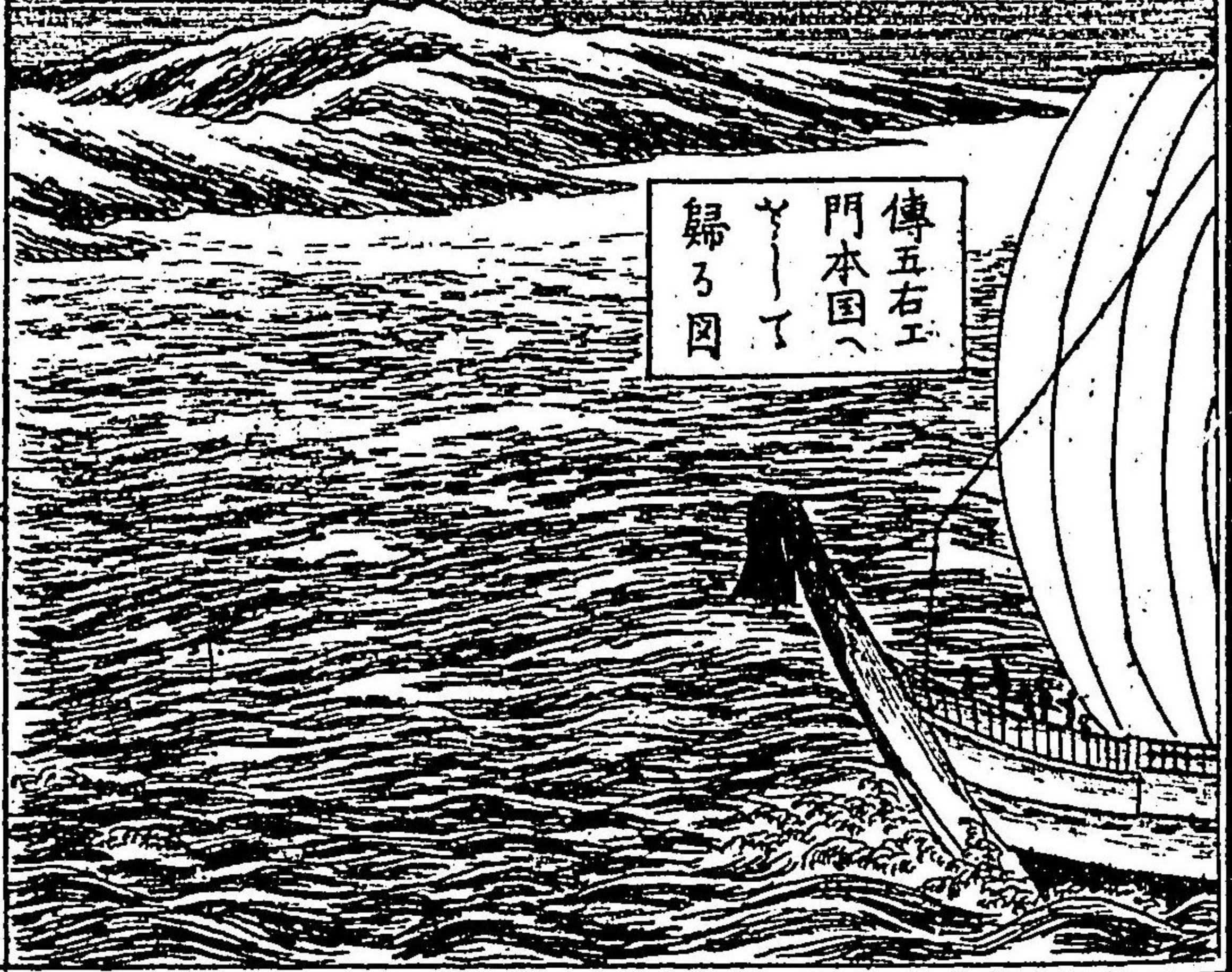




俺本國へ帰つて帰らんと思ふは、其許達俺名  
 母親族們此辺尋ね来る人も有、其許達俺名  
 を能覚へて、今人々へ傳へ給へ、倭令遠境  
 を隔つ、雖も迎ひよたよ来る絆あ、何時  
 まで通ずかんと俺の票置つる由を達し  
 給、祝着をへし何方も憑三票をぞくしと  
 云、農夫們諾ひつ、御憑三心得侍ふことと  
 食々感して立去よける、悠て浮田傳五右工門  
 り、最早願拜も早る絆、願の日限断さる  
 裡、此も疾く帰國せん、件鹿十郎を信  
 つ、己も鳥を経て豊後國佐伯も出て衆船索  
 め鹿十郎も同船さ、這來傳五右工門、慈  
 情深く逆ハ様、介抱添て食物までも美味  
 を撰、真情竭して列られける、や前も變り  
 て一度も暴も質、頼ひ同道して船小来て  
 も狂ハされ、主僕ハ思ふも易く、けり  
 て打飲ひ、日を重ねて終る阿州祥瑞城へ



無事の着松ふたりける、是や宿世も笑る奇  
 縁ある、人傳五右工門ハ、氣小帰宅し、長の旗  
 路の話し交説、次鹿十郎が、躬の上語りて妻  
 子の的へも射らせければ、物云、絆而已、差ふと  
 雖も、漫飛出、絆もなく、一の室間、閑置  
 尽、管つり、と鳥を暮しける、然、此傳  
 五右工門、兩個の男子あり、長子を爲十郎、正  
 通と云、氣を民助、正辰と叫り、今年廿一才と十  
 六才、成兄、氣、剣道の家、生れ、ハ父の教導、ま  
 習練、切差、球摩の上達、か、ね、長子、爲十郎  
 ハ、別、大守、より、宝蔵、ある、御、鑑、預り、の、御、番、を  
 命、給ひ、よける、民助、ハ、未だ、若年、ゆへ、無役  
 まで、家、罷り、有ぬ、借、亦、主の、傳、五右工門、も、  
 主家の、典、禁、頭、へ、乞て、鹿十郎、が、狂病、を、語り、介  
 医術、を、バ、望、ミ、けれ、ハ、一、時、典、禁、頭、浮田、も、來り  
 鹿十郎、の、容子、を、診、察、し、漸、者、へ、て、傳、五右工門  
 云、様、此、人、元、來、狂、乱、せ、ハ、勇、氣、の、剛、き、ま、心





の臟を破り且加ふる肝氣高ぶり終る五臟  
 逆上せしむる處之病症酷しくハ雖も靜かる  
 療治加へる則ハ全快する緯も有べりハ然  
 むら最も養生第一ハ且養生の仕様と謂ハ  
 大なる桶をバ整へて穴を明て病人を此裡  
 入閉室に置て人ハ値せ成食物寂莫  
 て食物ホも亦服薬も此穴より出入して或時  
 ハ静ま教訓を加ふる則ハ奈何ある重き病  
 症たり共全快せしと云緯ハ是ハ拙者ガ家  
 傳の秘方數多此術にて救ひたりけり且誠ニ  
 調劑せんとして服薬途与煎法授けて典藥頭  
 立歸りける傳五右工門ハ教への依る桶を  
 整へ穴を明て鹿十郎を中へ入しめ靜なる  
 一室に伏置養生させ緯鳥の二月計り介間  
 ハ時々詞靜ふ傳五右工門教訓を加へけれ  
 醫術と省病の至實少へまや九七八十日の介  
 裡ハ難なく正氣を復しけれハ傳五右工門



ハ大なる飲び而して誠ニ出處姓名時  
 間違ふ詞も有ぬハ一時傳五右工門問て曰  
 抑汝ハ那方の的よて名ハ是那と呼るの予  
 ヤ父母同胞一族も有ん話ハ奈何と尋ねけれ  
 ハ鹿十郎此時始めて駭き元來拙者也御氣へ  
 未だ一向覚悟仕らば方乞前後御示し預り  
 疑念を晴させ給はるべしと低頭平身して稟  
 けられ傳五右工門ハ然こそと打笑汝ハ  
 世處を何國と心得るや亦茶を誰とる思ふら  
 ん心中の處存聞しべしと問鹿十郎答へて稟  
 手様ハ拙者緯頃日までハ痛心神朦朧となし  
 て前後始終を辨へず侍小身体心氣空蟬の如  
 く総て忘却仕り侍少ハ世處ハ勿論ハ御氣  
 の模様一切心得之なく侍御尋ねよ就て  
 き入而元來御知音もぬ尊君様且御家宅





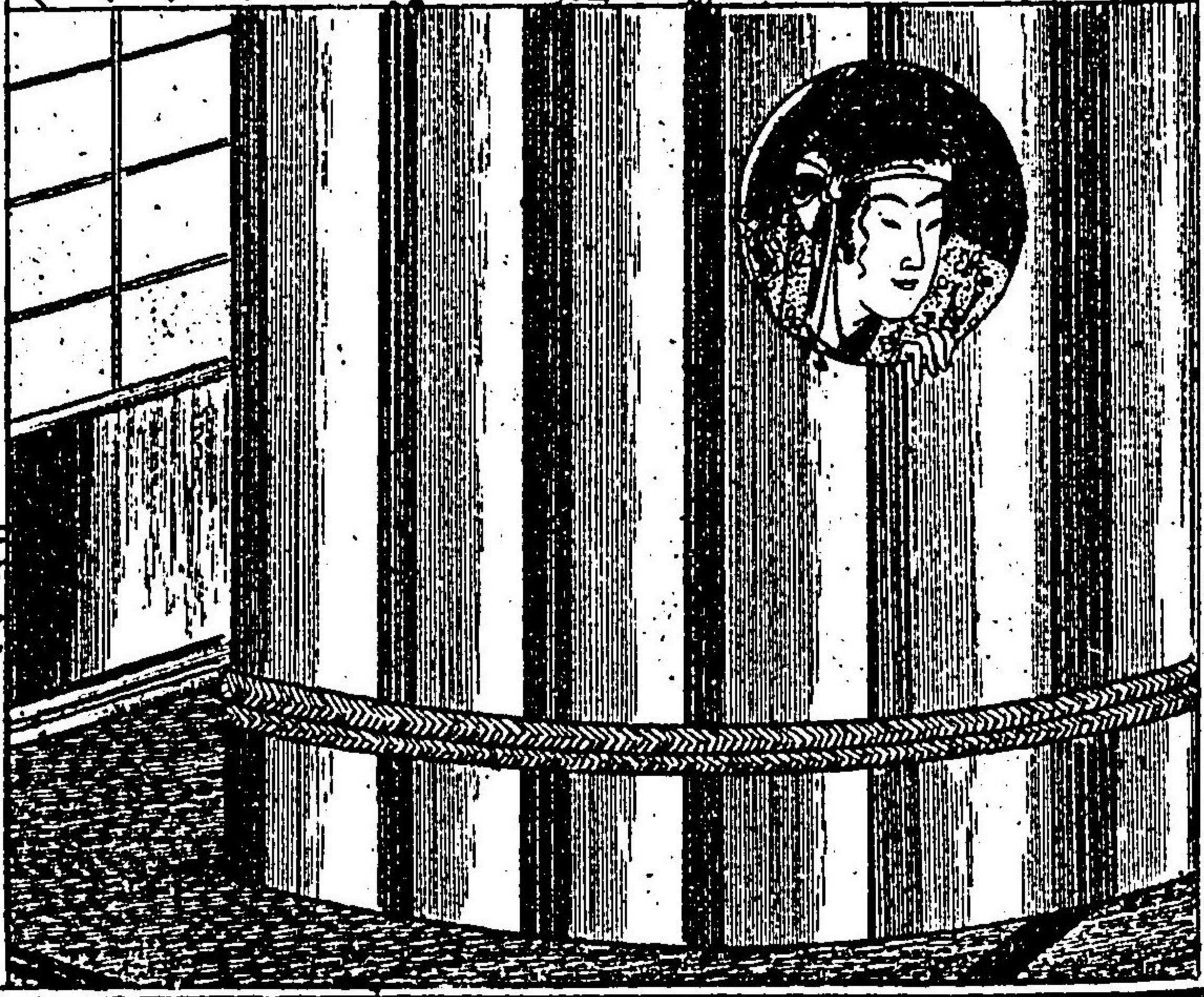
の御衆中とて一度も者受奉りし癖あり一  
向は會得参らまへて途方暮居侍絆なり  
仔細御話説下されば廣大の御慈悲侍  
とて躬を譲りて速まける

四回 大館搦悪計浮田為十郎難儀の話  
此時傳五右門語りて曰く汝の心底然こそ  
有べし柳や國ハ阿波國祥瑞の御城守  
音川右京大夫頼元殿御藩中某ハ浮田傳五右  
門正晴と云則ち御師範を蒙るの心せぬ  
の御殿を願上し九州の地は遠定して太宰  
府彦山阿蘇嶽に詣りて肥後隈本の郷に  
到る志水と云属村に十野辺は争論の衆  
人あり那絆なるやと尋ね看れば乱心したる  
男を相敵の地の農夫之を討居んとて甚し  
く罵問く乱心の的ハ則ち余方之俺且農夫  
を押宥めて屢余出外を問われ共誰一個  
たる的ハあく借才の容を贖る処人品能  
衣服



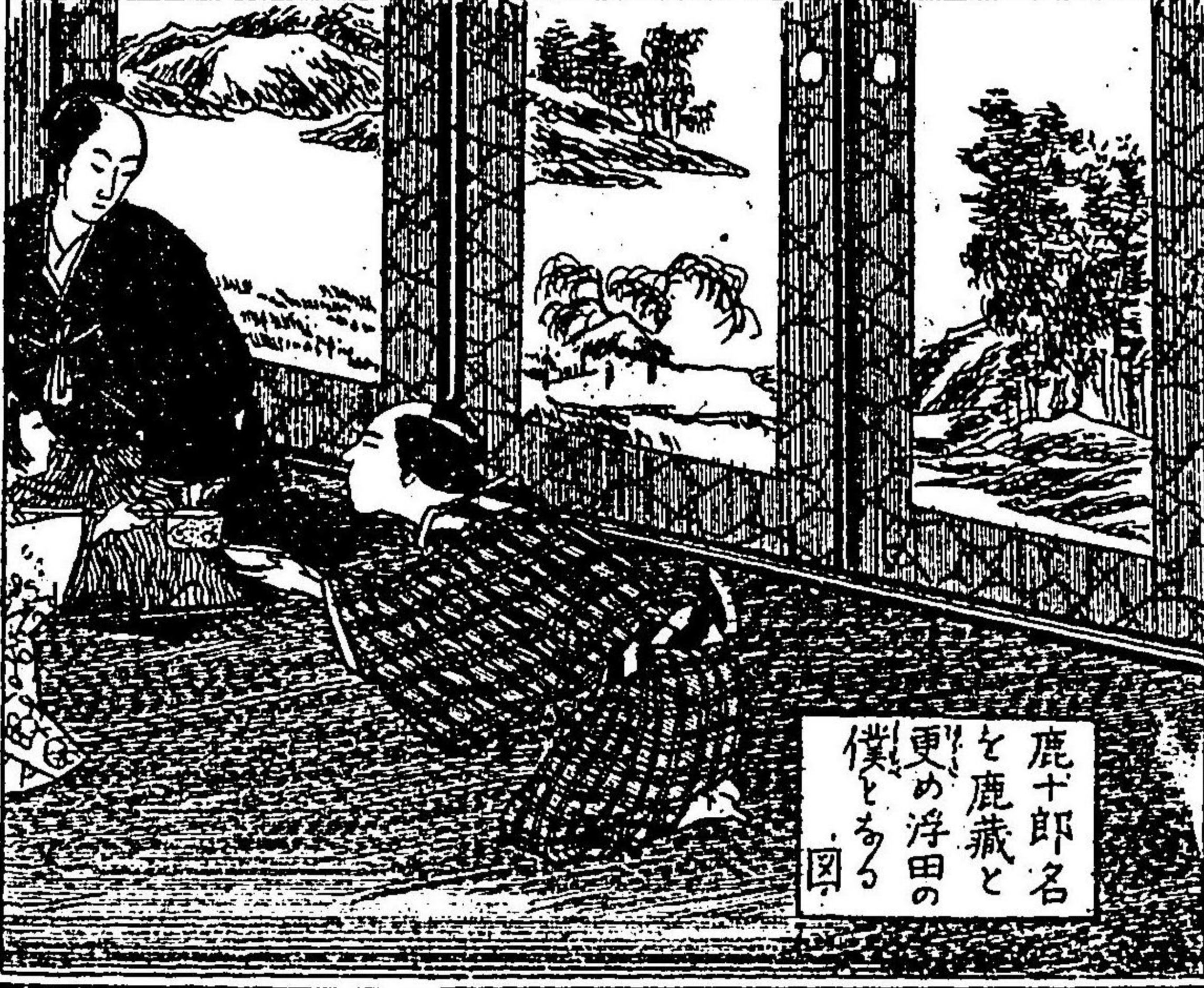
傳五右門  
醫者の指  
囚を受て  
鹿十郎看  
病もる囚

も早しう然共泥塗れ頭ハ乱髪何  
様狂乱の体見れ故農夫は俺住國姓名を  
告て尙汝の一族尋ね來り傳へ異と稟し  
遺て則ち汝を同道せり自夫豊後佐伯  
出で乘船して歸國仕たるハ去年極月中旬  
絆へ侍て後余方の病症を俺主家典藥の頭へ  
乞受治方の医術を索め一桶伏閉養の一法  
を施され凡二月余り誠たるハ斬念正  
念うく今八十日余を経て本復そ如何や精  
心清々しく成て人事は明も到り俺云  
夢の心地やせん是余方の幸甚し傳五右  
門も人一個助る數日の省病切頭ハる物  
俱に飲ひ千倍たるべし今ハ早其方の躬の上  
父母親族の許へ宛て尋ねる處あるぞ  
と慈情を明して話説ければ鹿十郎再び  
且感謝の落涙數行は速く少刻ハ哭入  
面も得上る心裏にて思惟様ハ暗浅様や耻し





やか如何ある宿世の業報まで乱心狂人  
 成つるのそや父ハ菊池の一老臣ある佐野  
 孩児とも云る、躬の二万八千貫の武士と産  
 九洲の地名を知らぬ、狂病の爲に耻  
 輝しく惑ひ出つる物と思へバ父母同胞まで  
 此躬ありて耻を与へし物と顧へり然るまで  
 も他家の主人ハ世に有難き仁者よこそ俺躬  
 の爲にハ命の親之恩と云儀と云畜ひと云人  
 も疎ミ狂氣の男を遠路を厭ハギ卒降られ  
 て然るまで省病患まれたるとハ余因事報  
 尽されんや殊ハ父母の名を告ぐハ父母の  
 耻ハ云も勿論ハ大恩戴ハ菊池の殿まで御名  
 を汚しむ道理なれば那とて明白云るべき  
 やハ況て徳全快をなすこととておめハ國  
 元へ立歸り那を手柄頼み人見參ん狂氣の  
 土産譚ハこそ愈耻の上塗なるべし定めて父  
 母ハ此鹿十郎を世に無的とや思ひ給はん



鹿十郎名  
を鹿藏と  
更の浮田の  
僕とある  
圖

王鬼指されバ二月三月を歴々と過ハ在り  
 へり尚浮田氏の慈愛を依り然こそ飢死を  
 や爲へくハん是父母の縁の故る時節ハ須  
 弥蒼海の恩ハ於ハ父母も浮田も輕重なし難  
 治の業病助りる上ハ生溼此人の家業と成て  
 因儀ハ報ふる奉公なきハ迫りて人の処作  
 るれ噫然ハ心を決しつ愁を止めて頭を下  
 誠ハ兼ハれハ不測の共恩躬ハ蒙りたる始終  
 の御話ハ今更謝ハ奉る小詞ハなハ奈何なれ  
 ハ若る奇縁まで親も増る惠ミを受て躬の  
 幸甚ハ生々世々御恩ハ忘れ稟せべくハ拙  
 者ハ生國ハ日向佐土原父ハ炭焼を世業とハ  
 して十才の頃父母ハ離れ殿ハ十五才の春  
 りて去御弟ハ奉公仕り廿年十八才まで侍  
 小名ハ鹿藏と稟侍り借何日の程もハ侍  
 如く狂亂の病と成侍りハ尤陰ハ聡と存  
 侍ハねハ自今國元へ歸り侍りて元の主家へ





参るても此仕裁おれバ手替り有べし父母  
 ハ固より死去たれば然る家とて外は侍らじ  
 追テハ御恩の九牛が一毛尊君様へ恩報ト  
 永く御下人とし給ひバ尚此上の御慈  
 悲にて侍ふ全く御縁の深き故に莫大の御  
 情を蒙る鹿藏が主君と仰ぐ尊君様より外  
 有べしと素姓を秘して望みけるも傳  
 五右衛門も深く歎び然る方を見望み  
 バ俺も於も太満足へ主従奇縁の結ぶ所然  
 バ今日より更めて俺家の奴僕とありて目を  
 懸百仕ひ得さきべし最も俺も兩個の孩兒あ  
 り為十郎民助と呼べるへ今方万事世話憑むぞ  
 と快く兼引有し鹿十郎大さき歎ひ  
 名を今日より鹿藏と更めて主従因む玉鐙把  
 くり闔宅一統も引合し鹿藏夫々恩を謝  
 して終る浮田の奴僕と成て心限なく忠義を  
 励み茲小早三年の光陰を過しぬ傳五右衛門

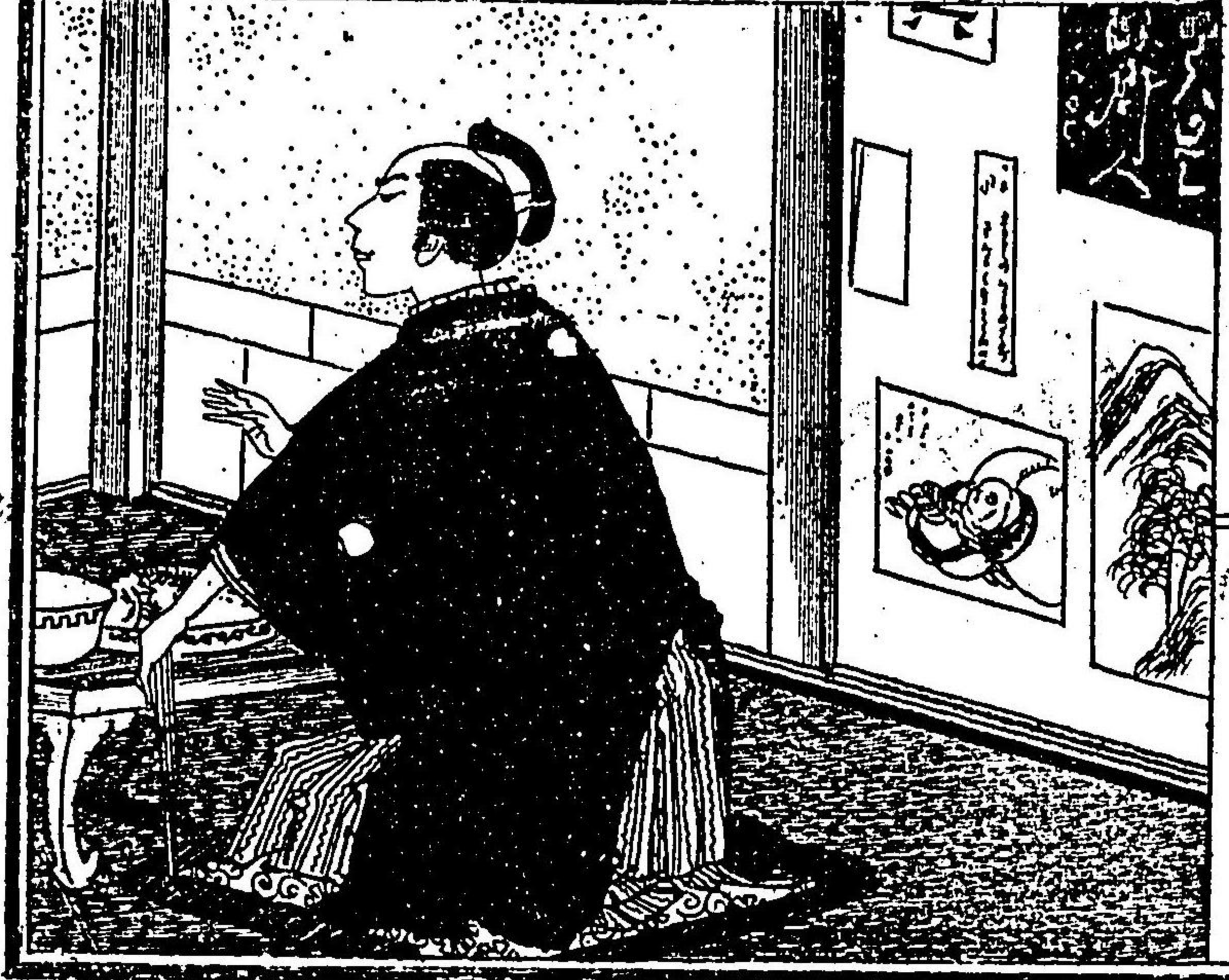


夫婦親子の的も親心の郎ホを得しと主従  
 水奥の交りて尚も慈情を加へたりけるよ  
 意義ある哉此鹿十郎一度救はる恩も感して  
 さし菊池家の一老臣二万八千貫を賜ふ所  
 の佐野出羽介が子息の躬を病の仇も躬を下  
 しりて今總に奴僕奉公して今恩主小仕する  
 義心ハ忠とや讀ん信とや賞せん義贈金鉄の  
 心操ハ禄も高下の思ハぬ処小介清潔ハ見ハ  
 れたる昔沛公を翼し張良の処作り近き裏  
 退の南帝を佐し捕正行の行作るも事恥べ  
 くるさる義勇然ハ後より到りて北國まで忠  
 を報して志し遂名を海内も挙たりけるも  
 忠義の一心は頭ハ物も借も亦茲も同ト著  
 中は大館七郎右衛門義廉と云是も剣道師軌  
 をおまの的あり奉祿三百貫を賜ひたり門弟  
 身附屬むせしが余心さき甚だ好侍して彼子  
 田の清直仁俊と云碁石の差有ら如し依て小





門葉の若殿原も属し心も分れり大館  
 一の弟子ある同藩中の若侍士橘左近之  
 助と云の有御近習役を勉めたりけり俸禄百  
 五十貫を頂戴す此の彼大館と等し倭忠  
 の森智の生質少へ頗る馬の合口なるを  
 て一日の絆し龍近之助大館の弟より  
 一席酒宴の上は於大館七郎右門稟しける  
 ハ夫武士の大志を欲するも興座ハ天の命  
 と雖も人の魂を利する物ハ名劍の徳を借さ  
 るよ於ハ名も拳難く亦功も遂げ然ハ原氏  
 ハ髪切勝九亦平家も小鳥丸あり世以是皆  
 知処へ其平生之を顧へば哀れ名有処の劍  
 もあふバ得まく欲する絆多年に茲一振の  
 名劍と云ハ世家音川殿の宝劍たる朝日丸と  
 号する物二千世に比類なき一重宝へ其是を  
 望むと雖も主家の宝ハ力も逮ハば思ふに任  
 せぬ世間へと云ハ左近之助勝を進めて先生



の命と最も侍誰しも能刀劍を得た候  
 へ拙者亦藩中み入在あぐ未だ朝日丸の由  
 來を知り正宗國吉波の平ハ多く武家ハ望  
 ミ稟せども世に些く一音る絆稀に況て  
 家の朝日丸ハ誰が鍛たる名作と若輩の某  
 傳來兼ハ願ふハ由聞給へと問ハ七  
 郎右門語りて曰く然ハ世家朝日丸の來歴  
 ハ九百年も以前の絆ハ人皇六十六代の帝  
 王一條院の御宇と云三糸通小住ける故  
 り則ち小名を宗近と云三糸通小住ける故  
 人食三糸小鍛治宗近と呼小頃同名の鍛治三  
 個あり九州に一個伊賀に一個あり然る人  
 皇六十五代の花山院と稟奉るハ宝作絶  
 二年より御落飾まで道世まり圓融院  
 の皇子を以御位直給小帝を一條院と  
 奉れり倍帝の御聖運守護の為此時諸卿  
 詮議を以て一振の名劍を鍛せんと諸國の





鍛冶を撰まれけるよ小鍛冶宗近は勝るものな  
 故に宗近へ勅定有けれど宗近畏りて美聞  
 する様ハ恐れあるが其丹誠を徹して速ハモ  
 なる鍛ひ奉らん茲ハ一個の奏する旨あり  
 傳へ聽奥州多賀の城跡ハ昔神龜元年甲子小  
 按察使大野朝臣東人ヲ築き城廓と兼り  
 傳小東夷守りの爲唐土より鐵を把寄武具を  
 整へ土中埋みて介上り石碑を建し侍  
 へハ是奥州の城跡の碑を把除去土中の旧  
 き鐵を賜はり是を地鉄として鍛侍り宗近  
 家秘の鍛術を以名劍鍛上侍ふべし奏す帝  
 此議を厭感ましく則ち時の武官よりける  
 多田源の満仲を命せて小鍛冶の奏する旨を  
 任せ多賀の石碑の下埋し鐵の箭三筋を  
 把寄給ひ賜て宗近へ賜ひ小鍛冶の家  
 の秘術を隨ひ古實を正し鞘を淨め七五三の  
 注連を結びて介躬齋戒沐浴ありて不日よ



一振の劍を挺上之を帝へ獻覽入る流石ハ  
 日本よ介名の高き宗近心を込て鍛ひ  
 焼刃の心をひ鑄の模様放ちたる介光り  
 霜夜の月氷雪の暗を照せる如く凍へて耶  
 章莫耶も是ハ然しと思ふ計りの名劍なれ  
 帝ハ殊に厭感浅くす時御殿へ照込  
 日光の劍添て輝きし則ち是を朝日丸  
 と號せ依て大内御代々の帝守護劍とて藏  
 め給へり楮宗近ハ恩賞下さる願ち道先  
 陰移りて南北而朝と分れし時音川勝氏等特  
 院殿に隨ひ披群の軍功を顕はされ尚亦明德  
 三年十月ハ南北而朝御和睦と成音川の先  
 君頼之殿介執結ひを計りれ故帝是を賞  
 給ふ余りも世家へ朝日丸を下し賜ひぬ世代  
 頼元殿特傳りて家宝第一と尊まるゝ處の  
 朝日丸と云ハ則ち是に依て此七郎右門が  
 望む旨意ハ介傳來を知るが故ぞと云く蓋





を橋へ進めて扇を開きて襟を撫分胸の傍を  
 撮きけられ左近之助ハ始めて暗たる劍の由  
 來に感伏ありけり左近之助声ひそめて曰く  
 先生然まで外望仕給ふ那謂謀計を述べて  
 密奪せざる外存無やと云ハ七郎右工門  
 駭きながら四方を瞻めて膝を進め足下の命  
 せ然絆おれども王家の室を如何ぞ得られん  
 左近之助打笑ひて曰く先生平日の御心も  
 似介ぬ然程に絆を憚り給へ何日望三を  
 遂る鳥有んや大切ハ細瑾を顧むとぞ奪ふ小  
 那の恐怖有ん余手段ハ箇様く大館の  
 耳小唇を寄て何哉悪計吹入れハ七郎右工  
 門掌を拍て感悦し惜も妙計奇く尚も  
 酒者を整へさせ橋を登心て曰く足下を若  
 きる処為あれども偏も御き思入と云ハ左  
 近之助打點頭て貴殿ハ俺為の師近なり師恩  
 報ぐるよハ是ホの絆一命は替ても勉むべし



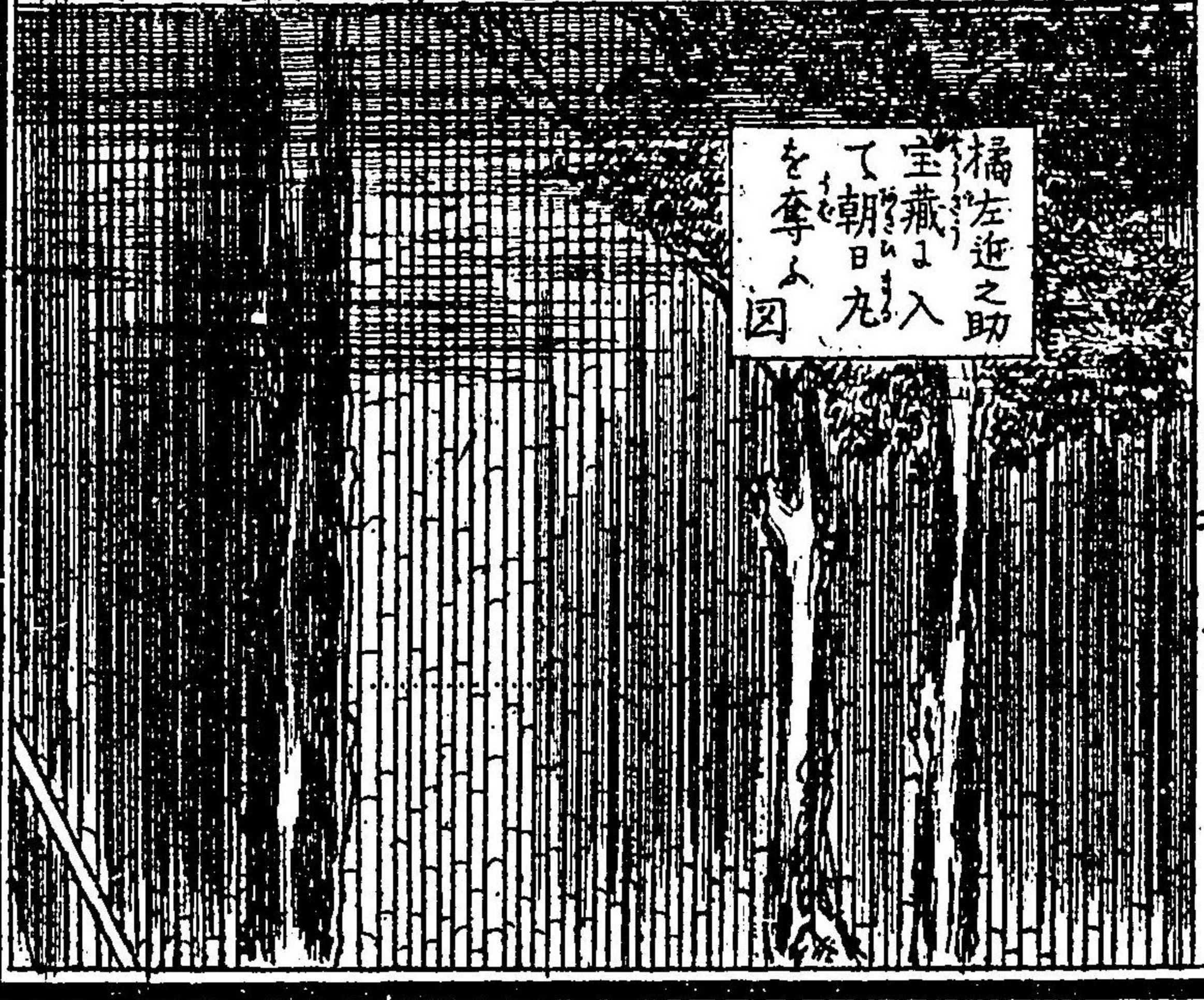
先生も手筈を達へ給ふな七郎右工門完示打  
 笑て余美ハ氣遣ひ有べりくびと双方閑談時  
 を了つて終は橋ハ弟へ帰るぬ恁て大館七  
 郎右工門ハ日來の望三を達せんものをと蜜  
 よ心勇三を生じて蝶合せて鳥を等よける  
 此奸臣們那絆り計るん干時応永も早七繪  
 なる頃ハ如月と成たりけるが未だ余寒も烈  
 く覚へる梅花の白ハ已不過て桃ハ色め  
 梢の蒼春霞引山々の帯ハ嬋媚たる女湯の  
 立客何國も遠望長閑ある心浮る時節あり  
 後計り絆もあれハ浮田為十郎の結  
 つる番所へ大館七郎右工門出來りて何哉四  
 方山の譚をなす已ま夜も入ても帰らざれハ  
 浮田為十郎も困りながら大館も藩中師範  
 の的ハ父傳五右工門同格を顧ひ役中あれ  
 ど敬ひ心者徒然を察して酒者を整へ話相  
 人成ける処ハ大館尚も番所を去る夜も入

大館強て  
 為十郎の  
 勤務を  
 妨げ回



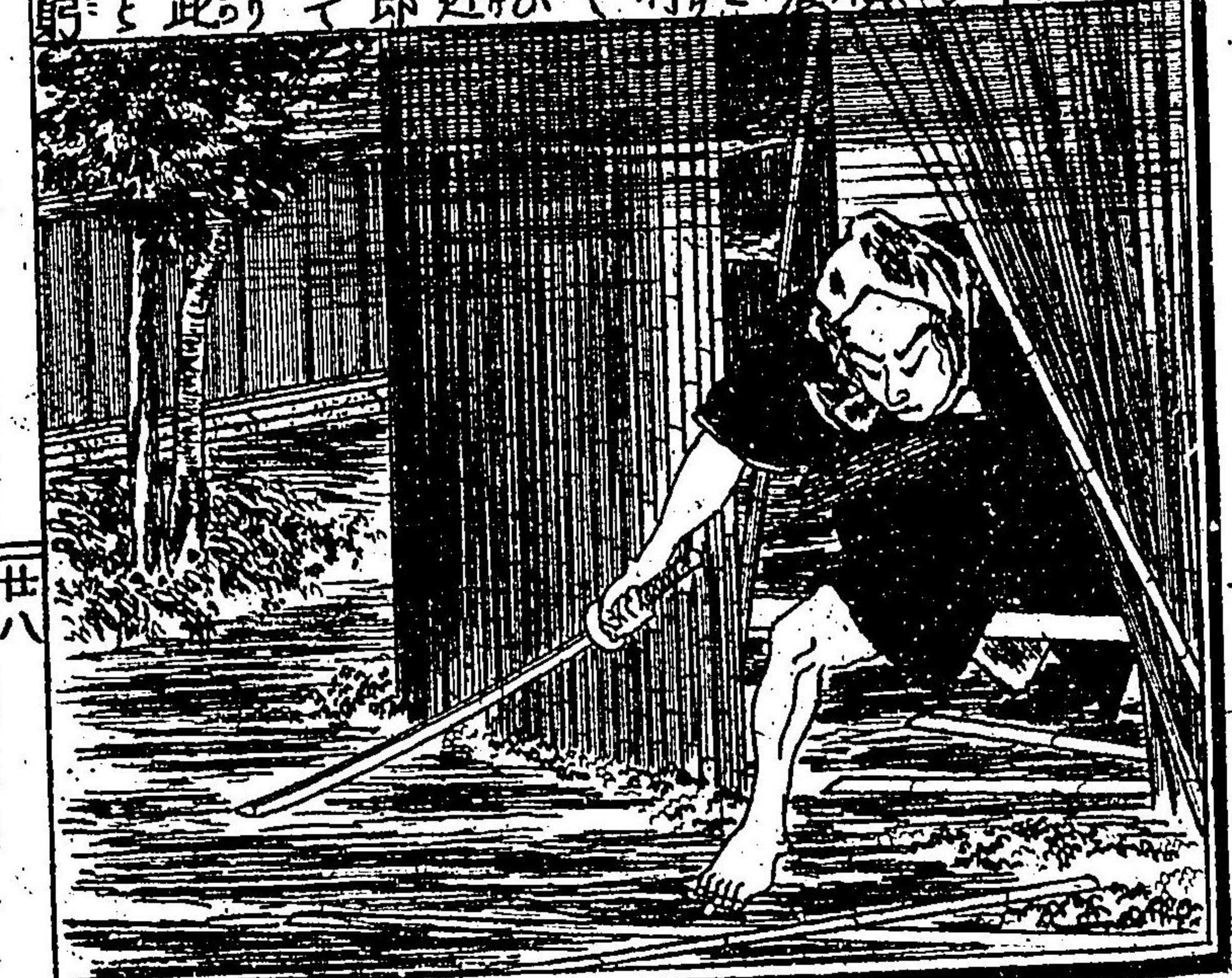


小雨の降出しけり今甲夜ハ足下も打窟ぎ  
 て余寒を酒氣は防ぎ給へと客の方より座を  
 長引せバ爲十郎愈迷惑し一時御免と席を  
 立んとキ七郎右工門余袂を引留足下俺を乗  
 置給ふ心ハ疾去りの思ひ召るや夫ハ余り  
 小難面存するこ下戸も上戸も明輩好意放ち  
 ハせしと戯れけれバ爲十郎ハ頭を搔つし  
 否左様の処存も頭待らぎ勤番の夜廻り奔ぬ  
 バ那共心懸り侍ふこ些の間退席願ふと  
 云七郎右工門打笑ひて曰く平生ハ右もあま  
 左もあれ此酒真笑坪の一會ハ然外されてハ  
 御術ハ悪し一夜ハ那絆り侍ふべきや御宝藏  
 よハ七重八重の塗廻したる白壁行垣あり戀  
 の柴垣キ他目を厭ひてもささハ踰難き改  
 ひかる小争夜盗の忍ハれざるんや御勤番ハ  
 上への大法戸鎖ね御代は災ハち卒々座し  
 て最一盞とて理なく削めて放さば爲十



橋左近之助  
 宝藏入  
 朝日丸  
 奪ふ  
 因

郎も詮方なく元の座席へ押道りて俱したる  
 奴僕而已廻らせて是非なく亦も相人と成太  
 く沈酔仕たりけれバ大館ハ夜半過る刻ハ席  
 を開きて兵兵つて詰りて立寄りくハ爲  
 十郎も酔ま忍ぎや余匠番所の一室小して横  
 打被きて卧たりけり是ハ余躬の大厄難浪  
 の根とぞ成けるこ借亦橋左近之助ハ大館七  
 郎右工門と標し合し今夜御宝藏へ窺ひ寄竹  
 垣破りて壁を繰抜難なく忍ひ入て彼是探し  
 斬宝藏の區着付出して中なる朝日丸を奪ひ  
 拿り得たり利しと後暗まりて大館の弟も逃  
 來りつて七郎右工門の手は渡しけれバ七郎  
 右工門數度頂戴きて足下の賜物辱なりとて  
 三拜あてぞ歎ひける左近之助ハ弟は帰  
 て那知ぬ体よて夜を明たり噫息むべし此  
 兩個主家の宝を偷し合て罪を人ハ譲らん  
 なキ処極悪非道を爲ひたり共天鏡ハ羅る野





の罰報い願てぞ已は後り来る世利も感ふて  
後辨無的官を刀劍小躬を破滅まへし人欲長  
どききを破家と云正は此大館門の絆あるべ  
し已小翌朝奴僕の的ハ朝浄め小到りて者  
れハ御宝蔵なる養壁竹垣散々切壞きて有  
ける小早速為十郎へ恚と告る為十郎ハ大  
き小仰天一急ぎ支出して屏檢する小豈測ら  
んや御家の重宝朝日丸の名劔の箱ハ空蟬と  
成て有しハ為十郎ハ帝狂氣の如く庫中ハ  
勿論ハ此処彼処と小坪の内を尋ね廻り亦走  
歸りて狼狽惑ふハ切穿らる丸の傍小躬  
日外失ひたりし一固の釣匙落して有けれ  
是亦不測と思ふ処へ橋左近之助ハ出仕之時  
節為十郎の客子を者んとて已り処為を素知  
ぬ顔まで此処へと來懸りつ一大き駭きた  
る体をなして噫手滑りたりと眉をひそめて  
故意客子を尋ねあんど是ハ氣の毒千万と



橋左近之助 浮田為十郎と訪ふ因

私言ける為十郎ハ一向途方小暮橋氏御前宜  
く憑入と面目なげ聞へけれハ左近之助  
ハ打點頭て御刺漆甲斐小悪く稟さ併  
が御劔の紛失正賊徒の処為と者少れハ  
早殿覚悟ハ致さるべし御役中油断ハ何とも  
早某どのの執成るハ御前の思召計ハ難し  
と心着さへ真綿の針詞多し能退タ御殿  
をさして立去る者も此時仕城ハ音川  
頼元殿の御息男左金吾滿元と稟して御若殿  
在城致されたりける大殿頼元ハ去つ頃  
先考頼之殿と逝去後ハ二代の管領職ハ任  
ふれ斯波畠山と諸俱ハ室町柳管を御執政  
へ本國へハ曾て帰らば阿讃兩國の政事ハ  
ハ老職長盛藏人へ計ハせ若殿滿元の補佐を  
命せざる老職長盛忠良の人まで有ハ上を  
ひ下を憐み君を泰山の易き奉じて理法  
の三を正しく國内徳守護けれ頼元安



世九



心して在京仕給ふ然程は橘左近之助ハ御室  
 藏夜盗の博末宝劔掠奪せし爲体を早速若殿  
 へ言上せしむ満元殊の外怒り給ひ老職長  
 盛藏人を召れて此趣きをバ語り給ひ朝日丸  
 ハ天子より下さる名劔之夫を假初も賊の  
 処爲小奪の把れしと聞ゆる則ハ禁裏征夷へ  
 の恐れ多し急ぎ目通りへ爲十郎をバ介方稟  
 一度して召出まへし予自ら糺明遂て介罪知  
 せんし憤り給ふ藏人も大さ小駭きて是ハ忌  
 々しき珍事仕出しけりと深く心配せしれ  
 り共君命是非なく畏りて即座を爲十郎を呼  
 出しぬ満元居丈高は曰ひけるハやをれ不忠  
 者奈何心得るや予家千載の誉れと成し朝日  
 丸の名劔は於ハ祖父頼之殿より特傳ハる天  
 子頂戴の至宝なるを汝役中の懈怠なして偷  
 ませたるも聞ゆる則ハ主家奈何様の御咎め  
 り有ん殊は父君御在京の留主諸事異變なく



若殿怒て  
 爲十郎を  
 手打させ  
 人と申る  
 回

守護すべき処は存外の仕越不屈至極ハ稟  
 開きの證據も有や奈何ハ責問給へハ  
 爲十郎ハ恐れ惶々薦席を平伏て稟け  
 るハ思ひがけなき此窮の不調法令と成て言  
 上の條なく侍小帝不測も存侍小絆ハ其  
 日外より失ひ侍小処の釣匙一拵落しこれ有  
 自夫外小證據らさ品ハ味吟仕共首へギ  
 侍小宝劔奪ハれ侍上ハ如何様の御刑罪を蒙  
 る共有難く御請稟奉ると覚悟極りて言上  
 手ハバ満元愈怒り得忍そ敦圍暴く命せける  
 ハ已分失ひし品を以證據呼り甚不審胡  
 乱の返答奇怪にけり去手討まなして遣さん  
 其処も退そと曰ひつゝ扈從も持せし御佩刀  
 を拿拔打し斬着んと仕給ふを老職長盛藏人  
 支り倚て御掌下を留めて稟しけるハ御立服  
 ハ御最も存下奉る然かか帝今爲十郎を  
 一時御怒り小衆せしめて御手討し越ハさ





共失たる宝剣出るも非ず且ハ此緯未だ  
世間ハ風説流す云々侍らば藩中の外  
ハ知的もむし罪名有と稟なぐ為十郎  
御鑑領りの余職分の世人なれば朝日丸の  
詮議の御役は於ハ則ち為十郎の役目へ恐れ  
なぐ御賢慮巡されて某へ為十郎が一命を  
暫く御預け給はるぞなぐバ急度吟味を仕り  
侍らん且々御佩刀をバ収め給へ裁人が一箇  
の御願ひは侍心哀れ御聞届け下さる様備  
小希ひ奉ると宥めける若殿満元命せけるハ  
裁人の諫め然緯なれとも父君への稟譯と  
云此緯朝廷へも職へなぐ予音川の家抱ハ  
るべし汝此旨奈何計ふと問る長盛裁人稟し  
ける様ハ恐れなぐ世間風説を仕るとも君  
より余御届け是は御家抱ハる議ハ侍  
ハギ家災ハ防ごま如侍ふとぞ固より大殿  
の御耳も裁人は於ハ計へ稟さば能詮議し



て把返し再び宝蔵へ収む小到りバ却て詭へ  
ざるま倍べく侍御賢慮如何と答へけれバ  
満元些し御面を知きて上への処ハ隱便の旨  
意汝の処存は任せべけれ共為十郎はう簡  
なぐ以後一藩中の心得の爲速ま切服を稟  
し付て介方介借なぐて把返し猶豫ハ罷り  
あふぞと命せられて為十郎を眊付て衝と興  
殿へ入せ給ひぬ先之助ハ先刺より空嘯き  
て聴居たりし仕済たりと心よ笑て古軍  
摺して殿を属ひ俱小後小引添入ける長盛  
裁人ハ打雲れたる爲十郎を慰め謙して引立  
て同道なぐめ終御殿を退出して俺弟よ  
立寄りしが殿より預りの罪人なれば為十郎  
を一室に閉込火急は諸藩中へ觸度して宝庫  
夜盗の一件は於ハ一言一句も口外をせへり  
ふも備此最命は嫌るのあらハ急度曲事稟し  
付るへと残さ觸廻して押へける早竟浮田爲





十郎の後の躬の上載人奈何計ふや否や次の回も説分を首給へ

繪本佐野報義録初集卷之早

明治十八年三月七日  
同 年 四月九日

翻刻御届  
成

定價金十八錢

編輯人

大阪府平民

知 足 館 本 旭

原版人

大阪府平民

北 村 宗 助

翻刻人

鹿 田 源 藏

賣捌人

星 野 熊 吉

繪本佐野報義録全八編

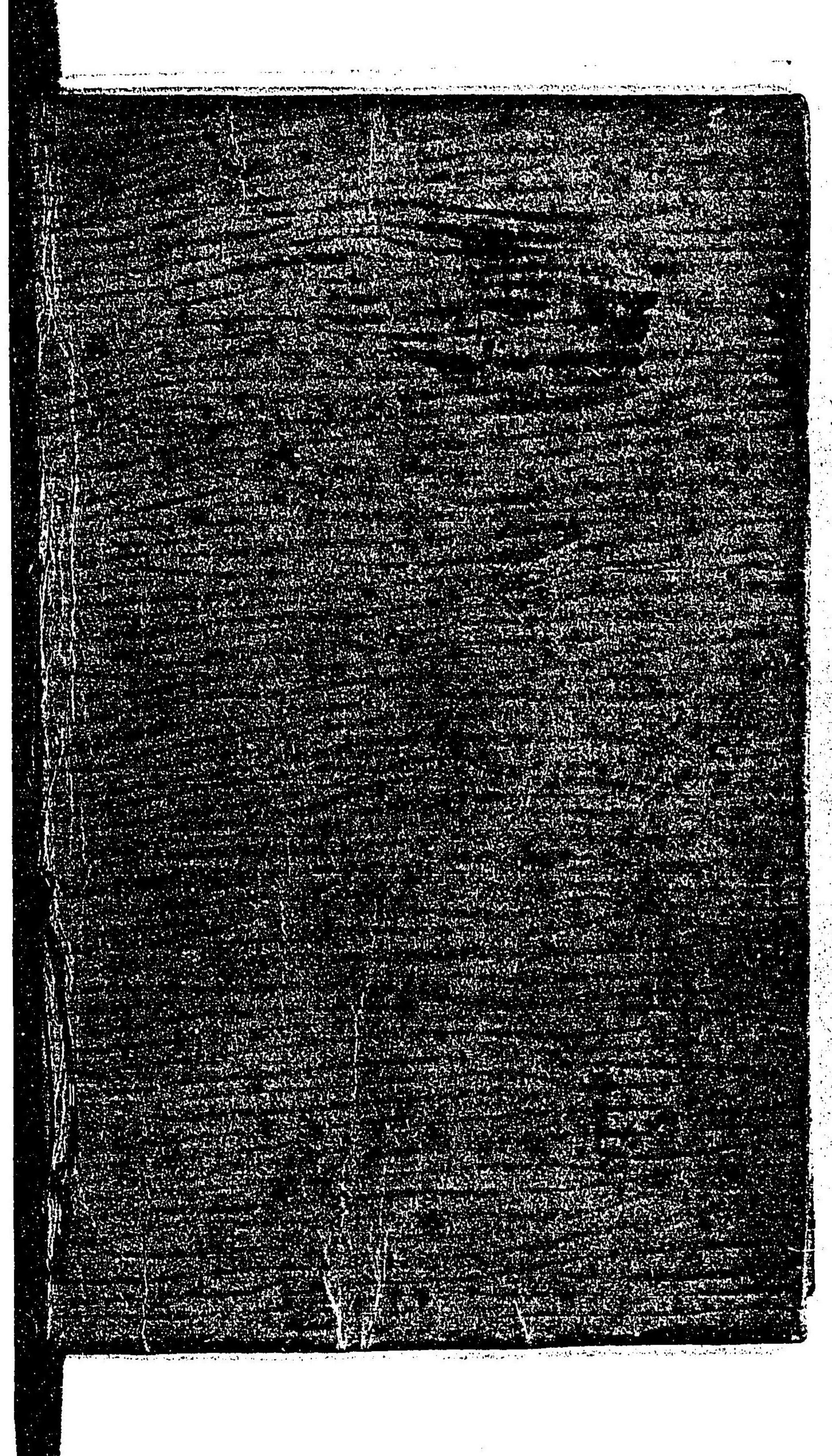
二編 四月中出版  
三編 ヲリ毎月出版

東區安土町三丁目二十番地内宣齋戸  
東區三休橋筋北久太郎町北へ入

書 林

大阪	森	本	太	助	全	辻	本	秀	五	郎
全	梅	原	龜	七	全	田	中	太	右	衛
全	吉	岡	平	助	全	前	川	宗	七	
全	赤	志	忠	七	全	此	村	庄	助	
全	花	井	卯	助	全	小	山	龜	松	
全	岡	島	真	七	全	梅	原	市	松	
全	北	尾	禹	三	郎					
全	岡	本	專	助	票	田	中	治	兵	衛
全	濱	本	伊	三	郎	全	川	勝	德	次
全	岡	田	茂	兵	衛	全	杉	本	甚	助
全	野	村	長	兵	衛	全	石	田	忠	兵
全	中	島	德	兵	衛					







特60

243

205065-001-5

特60-243

繪本佐野報義録

知足館 松旭/編

M18-19

EDV-0058

